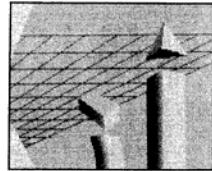


モノグラフ・高校生'90

vol.29 高校生の国際感覚



放送大学客員教授 深谷昌志

目次

要約とまとめ	2
第Ⅰ章 教育の国際化とは	4
1. タクシーもさまざま	4
2. 食事マナーの違い	5
3. 多民族の中の生活	6
第Ⅱ章 高校生と海外との接点	7
1. 日本に生まれたい	7
2. 外国人としていること	9
3. 海外との接点	11
第Ⅲ章 どれくらいの外国語の力がつくか	15
1. 習いたい外国語	15
2. どれくらい海外で暮らせるか	17
3. 英語を身につける努力	20
4. 20歳になった時の語学力	22
5. 40歳ぐらいの語学力	23
第Ⅳ章 諸外国のイメージ	26
1. 日本のイメージ	26
2. アメリカのイメージ	29
3. 韓国のイメージ	31
4. 日本の高校生	33
5. アメリカの高校生のイメージ	34
6. 韓国の高校生	36
7. 仲良くしたい国民	38
まとめにかえて	40
資料1 調査票見本	41
資料2 学年・性別集計表	53

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

要約とまとめ



① どこの国に生まれてきたいか

日本が39.4%で第1位。以下、オーストラリア（17.3%）、アメリカ（16.8%）となる（P.8図1）。

② 外国人との接触

「握手をしたことがある」が27.0%に達するくらいで、接触は少ない（P.9図3）。

③ 海外との接点

新婚旅行に海外に行きたいし、行けると思う。しかし、海外との接点は、それ以上はむずかしい気がする（P.12図6）。

④ 海外と自己像

むずかしい大学への進学群は、仕事も含めて海外へ行く機会が多いと思っているのに対し、非進学群は、新婚旅行へ行くぐらいしか海外との関係はないだろうという（P.13図8）。

⑤ 英語の力をつけるために

英語の力をつけるために、CNNなどを見ている生徒もいるが、全体としてあまり努力していない（P.20図14）。

⑥ 20歳の時の語学力

あいさつができるか、スーパーで買い物ができるくらいだろう（P.22図17）。

⑦ 40歳の時の語学力

40歳くらいになったら、語学力をつけるようにしたい (P.24図20)。

⑧ 日本のイメージ

平和で、豊かで、食べ物がおいしい (P.28図23)。

⑨ アメリカのイメージ

土地が広く、民主的 (P.29図24)。

⑩ 韓国イメージ

イメージがあまりわからないが、民主的とはいえない (P.31図26)。

⑪ 日本の高校生のイメージ

大学進学を目指してがんばっている (P.33図28)。

⑫ アメリカの高校生のイメージ

デートをしたり、スポーツをしたりして楽しそうな生活 (P.34図29)。

まとめ

高校生は外国との接点は少なく、将来も新婚旅行の時に行けるくらいだろうという。そして実際に、外国語もうまくなりそうもないと思っている。国際的に活動したいと思っているのは、一握りの難関大学進学希望者の生徒たちであった。

それと同時に、生徒にとって外国とはアメリカ、そしてヨーロッパであって、アジアに対する関心が薄いのも気がかりである。

〔調査概要〕

対象●東京都、広島・宮崎・鹿児島・静岡・福島県の高校1年、2年

時期●1989年12月～1990年1月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成 (人)

性別 学年	男子	女子	計
1年	427	144	571
2年	617	304	921
計	1,044	448	1,492

第Ⅰ章 教育の国際化とは



1. タクシーもさまざま

このところ、「教育の国際化」が教育界の流行語になり始めている。そして、ともすると国際性を欠きがちな日本だけに、教育面での国際化が必要なことは確かであろう。

そうした国際化の流れに沿って、国際高校が創設されたり、外国人教師を招いて教壇に立ってもらう、そして、姉妹都市との間に子どもも相互の交流を図るなどの試みが行われている。

しかし、そうした話を聞くにつけて、「国際化」とは何だろうかと思う。政策レベルになるとやむをえないのかもしれないが、「国際化=英語に強くなる」という感じ、あるいは外国人と接する機会をふやすのが国際化という発想

が目につく。確かに、間違っていないとは思う。しかし、英語に強い人がすべて国際人ではないし、外国人と接すると国際化するとは限らない。それだけに国際化とは何かをシャープにしておかないと、論議が迷い道に入ってしまうような気がする。

子どもを対象とした国際比較を行っているので、このところ、毎年何回か海外へ出かけている。もちろん観光旅行でなく、子どもの生活を聞き取る調査なので、それぞれの土地の人びととふれ合う機会が多い。こうした中から、日本ではあたりまえに思っていることが、社会が異なるとさまたがりするのを体験してきた。

オークランドへ行ったとき、タクシーに乘ろうとした。ドライバーが助手席のドアを開ける。白タクを頼むつもりはないので断って、後ろのシートに座った。しかし、町中で見ると、助手席に人が乗っている。聞いてみるとオークランドでは客が助手席に座るスタイルが一般的らしい。もちろん、これまでこうした光景を見かけたことはなかった。なぜなら仮にアメリカで客が助手席に乗ると、ドライバーは現金をとられるのではと恐怖を感じるであろうし、客も、ドライバーをそれほど信頼していないから、隣のドライバーに対して不安感をおぼえる。

そうした意味からすると、オークランドの事例は、ニュージーランドの治安がよく、人が互いを信頼できる、というような風土の上に成り立っているのがわかる。

もっとも助手席に乗るといえば、ソウルでもそうした光景が見られる。ただし、ソウルでは客の相乗りが一般的だ。タクシーが少ないと、ソウルでは行き先が同じだと客の相乗りを行う。大通りで客のほうが行き先をどなる。それが車の進む方向と同じだと乗せてくれる。その結果、見知らぬ人が3人客になって車に乗ることも生じる。そして、1人でタクシーに乗りたければ、コール、あるいはホテルと書かれた高級のタクシーに乗るか、それとも、ふつうのタクシーでも多少のチップをはずんで相乗りを断ることが必要となる。

タクシーといえば、バンコクのタクシーにはメーターがついていない。そのため、値段はすべて交渉次第で、行き先を告げあとはやりとりをし、値段を決めてタクシーに乗り込む感じになる。

2. 食事マナーの違い

教育の問題を書いているのに、タクシーの話から始めたのは、ごく平凡に思われることが社会によって異なる事例を紹介したかったからである。タクシーの乗り方がこのように異なるのであるから、その他のことについても、違いが大きい。

特に、欧米については、かなりの情報を入手しているが、身近なアジアのことと、無知な部分が多い。例えば、ソウルに限らず、韓国の女性たちは正式の形をとると、スカート(パラム)の下の片ひざを立てる。日本式でいうと、あぐらをかいしている感じで、初めのうち見よいとはいにくい。しかし、慣れというべきなのか、何度か見ているうちに、そうした姿勢に違和感を持たず、むしろ美的な感じを抱くようになった。

また、ソウルでは食事のとき、茶碗や汁碗

を持って食べるのは厳禁で、片手で机の上の茶碗をおさえ、テーブルから上げないようにして食事をとるのがマナーとなる。さらに、なべ料理などのおり、めいめい皿に取ってわけるのも厳禁で、そうしたことは他人行儀のように思われるという。

したがって、ソウルの町で日本の礼法にそって、お茶碗をきちんと持ち、漬物をとるときに、はしをさかさにして使ったりしたら、これくらいの無作法はないという失礼な行為となる。

実をいうとこの原稿はロサンゼルスで執筆している。小学生を対象とした国際比較調査を行うために滞在しているのだが、その下見を兼ねて、いくつかの学校を見学させてもらった。

3. 多民族の中の生活

たまたま訪ねたのは、ロサンゼルス郊外の学校で、520名の児童のうち、メキシコ系の114名をはじめ、韓国、中国、ペルトリコなど、28か国を数えた。中には、エジプトやスーダンなど、どうしてその国の子どもがアメリカに来られたのかを疑問に思う国の子どももいた。

そうなると、アメリカだから英語で教えるというわけにもいかず、実際にこの学校では、メキシコ語を第1言語とし、英語を第2言語、つまり、English as Second Language. E.S.L. の授業を行っていた。

アメリカにいるはずなのに、教室の中ではラテンアメリカの雰囲気がただよっている。そして、校長先生の話では、2～3年のうちに韓国語を第1言語にする教室を開く予定で、そのための準備に入っているという。

実をいうと、こうした学校を、これまでに何回も見学してきた。しかも、アメリカだけでなく、ヨーロッパでも、人種がまぎり合いで、そして、ひとつの言語——それがその国の言葉であっても——だけでは、教育をできない状況を視察してきた。

ロサンゼルスの前に滞在していたニュージ

ーランドのオークランドでは、英語に加え、マオリ語が課せられていたし、ポリネシアン言語の導入も検討中とのことであった。また、台北でも、北京語だけでなく、台湾語の教育を求める気運が強まっている。さらに、マレーシアでは、マレー語の授業を行っているが、中国系、インド系、英國系のそれぞれの人から、それぞれの言語を教室で教えてほしいという要望が寄せられている。そして、マニラでは、民族的なタガログ語の授業に対し、英語の授業を望む人たちの要望が強まっているとのことであった。

教室の中に、人種的にさまざまな人たちがいる。そして、人種が異なるということは、言葉だけでなく、食事や衣服など、生活そのものが異なるのを意味する。いわば、自分とは異質の存在として、友だちがいることになる。

「国際化」というときに、さまざまとらえ方がある。しかし、ひとりひとりを異質の存在として認め、そうした異質さをふまえて、共通性を探していく。こうした態度をとることが、国際化の第一歩のように思われてならない。

第II章 高校生と海外との接点



1. 日本に生まれたい

まず生徒たちは、どういう国に生まれたいと思っているのか。図1から明らかなように、「どこに生まれてきたいか」の問いに、39.4%が「日本に」と答えている。次いでオーストラリア、アメリカ、スイスとなる。

オーストラリアは、コアラの国、あるいは大自然に恵まれた国などとして、若い人たちの人気を集めているところで、テレビなどでも、シドニー周辺の風景がうつされることが多い。

高校生が生まれてきたい国として、オーストラリア、そしてアメリカをあげるあたりに、

テレビ時代の影響が感じられるが、それとともに、韓国や中国などのアジアへの評価が低いもの気にかかる。

なお「日本に生まれたい」についての属性別のデータを図2に示したが、女子よりも男子に、日本びいきが多いのが目につく。

なお、男女別の差をもう少し追ってみると

	男子	女子	(%)
日本	43.1	> 30.8	
アメリカ	15.5	< 19.9	
イギリス	6.1	< 12.2	

のとおり、女子に欧米好みの者が多い。

図1 生まれたい国

——日本が4割——

(%)

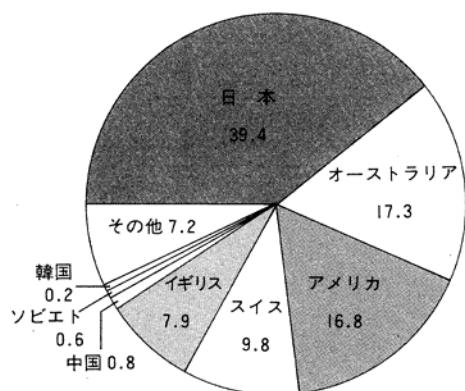
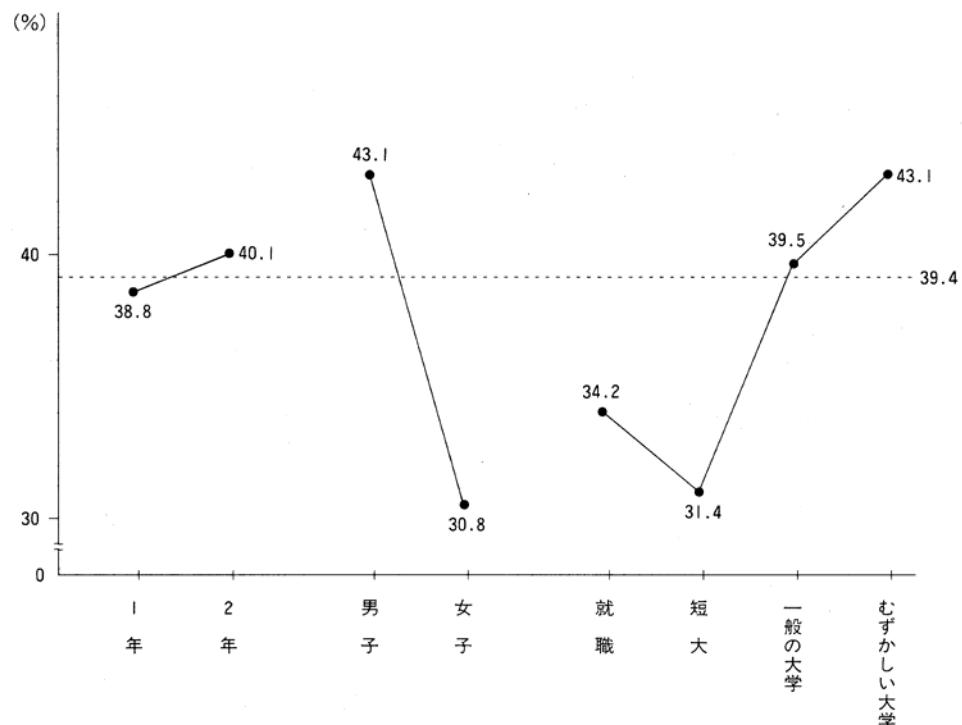


図2 日本に生まれたい×属性（学年・性別・進路）

——男子は日本びいき——



2. 外国人としていること

このように、生徒たちは日本をそれほど嫌がっていないように見えるが、それでは、生徒たちは、外国との程度接しているのであるか。

国際化といつても、それは言葉だけで、日常生活の中で外国に接するのは、それほど多くはないのが、生徒たちの生活ではなかろうか。テレビを通して外国の情報に接する、あるいは、外国製の物を買う、そして海外の情報を雑誌で知る、アメリカの歌手のCDを買うなど、生徒たちの外国との体験は間接的なものに限られているよう思う。

そして図3の結果でも、生徒たちが外国人としているのは、「握手する」か「あいさつをする」くらいに限られている。しかも「した」という者は2~3割にすぎない。したがって

国際化社会といわれていても、実際の生徒たちは、生きた海外に接している割合がそれほど大きくないのがわかる。

このように、生徒たちは、現在のところ外国との接点に乏しいが、それでは将来についてはどうか。図4に、「海外でしたいこと」の結果を示した。「新婚旅行に海外へ行く」ことは、できることなら、ぜひしてみたい。そして「1か月くらい、勉強に海外へ行く」のもしてみたいという。しかし、長期間、留学したり滞在したりする気はないらしい。

もっとも「したい」というのは、「できそう」と思うからそう考えるのであって、「したいと思してもまったく実現の可能性のない」対象について、「したい」と思う者はおるまい。

図3 外国人としたこと

—— 握手をするくらい ——

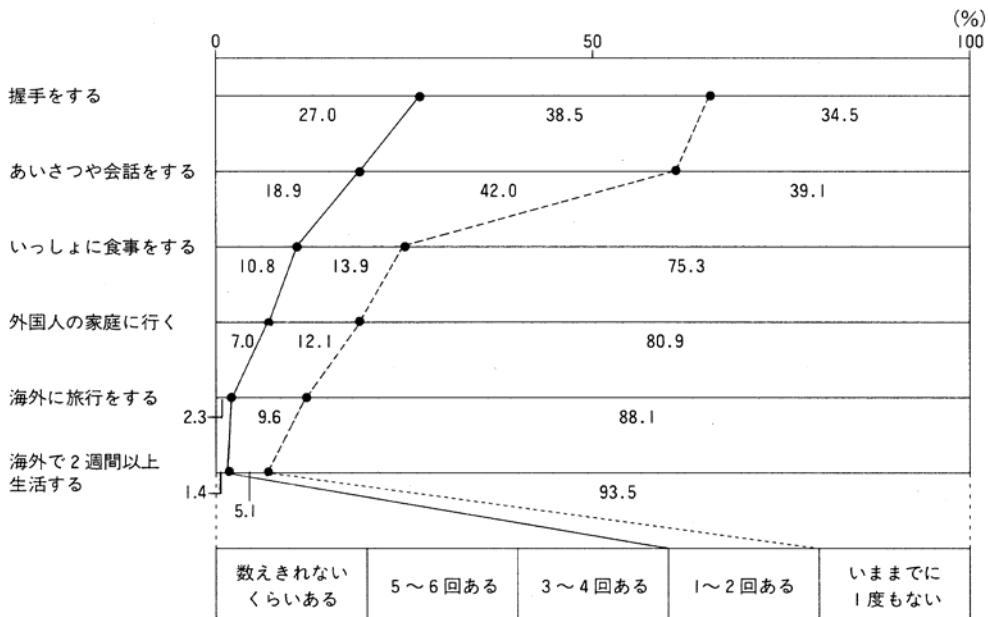
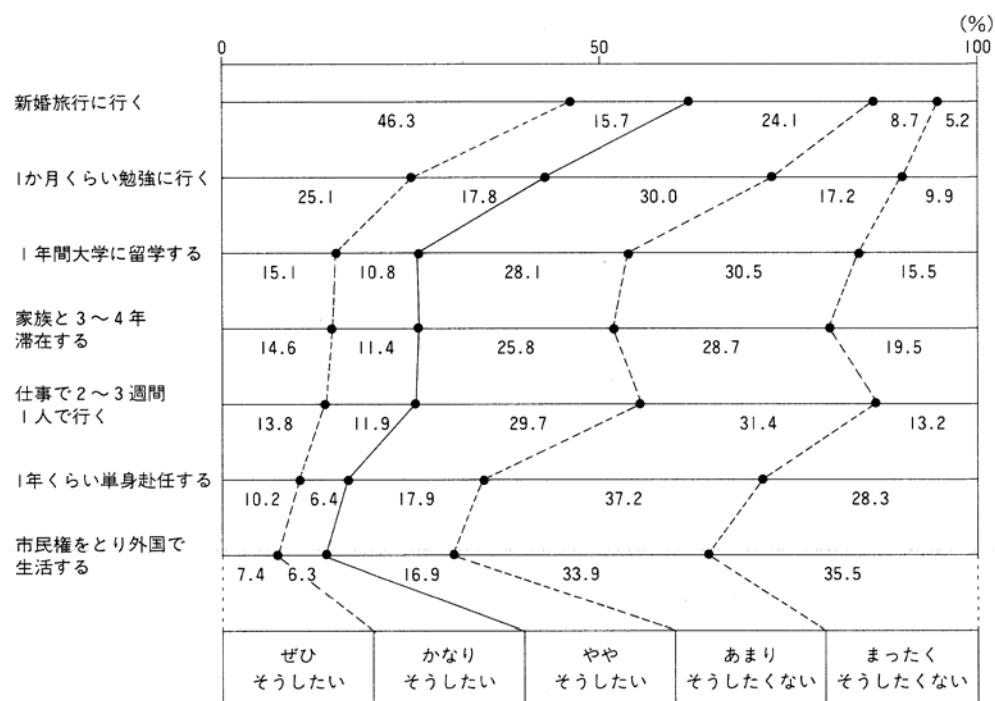


図4 海外でしたいこと

——新婚旅行は海外へ——



3. 海外との接点

そこで、将来、海外についてさまざまな活動をするのが、実際に可能かどうかを尋ねると、図5のような結果となる。図4と同じように、新婚旅行に海外へ行くことはできる。そして、1か月くらいの勉強や、仲間と仕事で海外へ2週間くらい行くのは、なんとかなるかもしれない。しかし、それ以上のことはずかしいだろうという。

そこで、「したいこと」と「できそう」とを対比して示すと、図6のようになる。

① したいし、できそう

=新婚旅行に海外へ行く

② したいし、できるかもしれない

=1か月くらい、勉強をしに海外へ行く

③ 無理かもしれないが、できるかもしれない

=仕事で2～3週間海外へ行く

④ 無理だろうし、実現の可能性もない

=1年くらいの留学や滞在

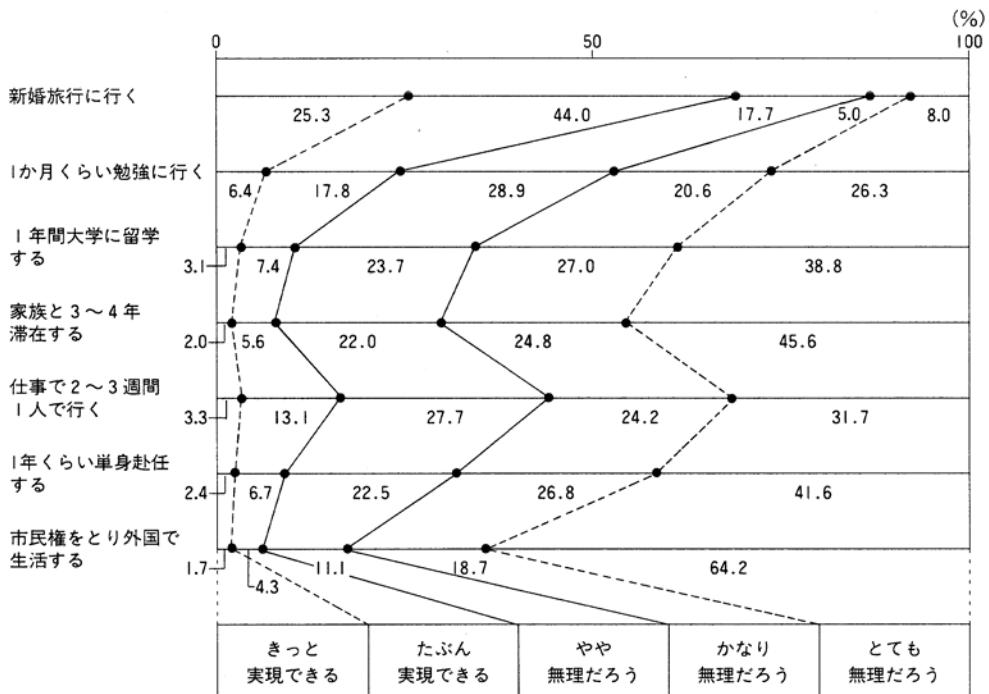
こう見てくると、どうやら、多くの生徒にとって、新婚旅行に海外へ行くのが、海外と接する唯一の機会のように見える。

それでは、こうした見通しが、生徒たちの属性によって、どう異なるかを示すと、図7のように、大学進学希望者のほうが、海外生活を送りそうだと思っている割合が多い。

確かに、進学を考えている生徒たちは、当然のことながら、英語も得意であろうし、それに、大学へ進学すればむずかしい仕事に就

図5 実際にできること

——新婚旅行は行けそう——



く可能性も強いし、それだけに、海外へ出かけることが多いと思いたいのであろう（図7）。そして、実際にも海外へ行けると思っている者が多い（図8）。

そこで、進路と海外体験との関係をまとめ

てみると、図9となる。つきつめて言うと、進学群は海外を自分と結びつけてとらえているのに対し、非進学群は、新婚旅行で行くのはともかく、それ以外では、外国は自分と縁が薄いと思っている可能性は強い。

図6 海外で「したい」ことと「できる」こと

——長期滞在は夢——

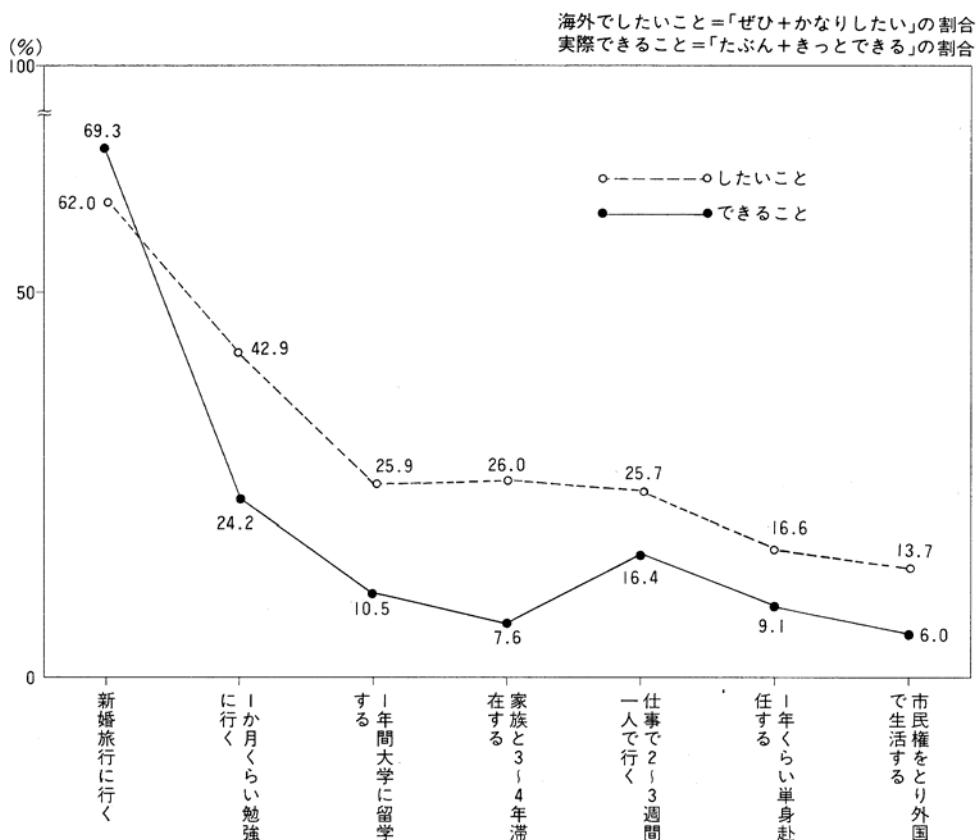


図7 海外でしたいこと×進路

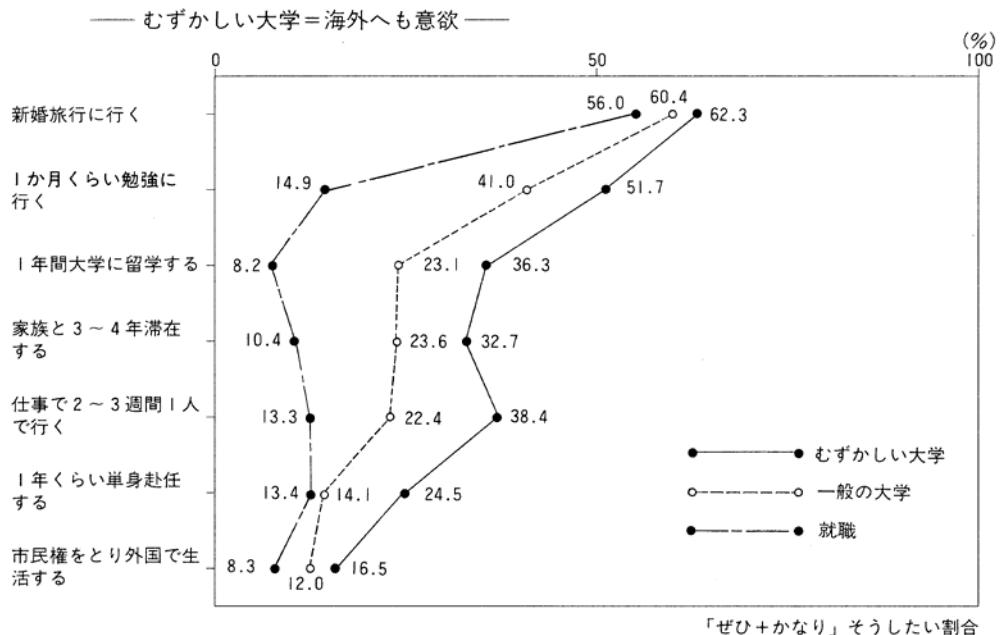


図8 実際できること×進路

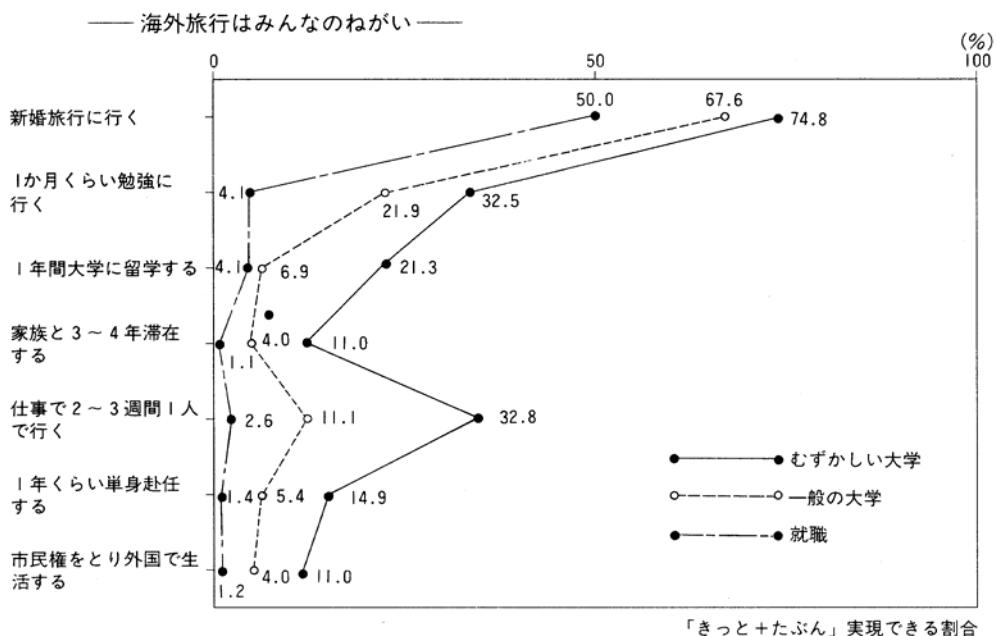
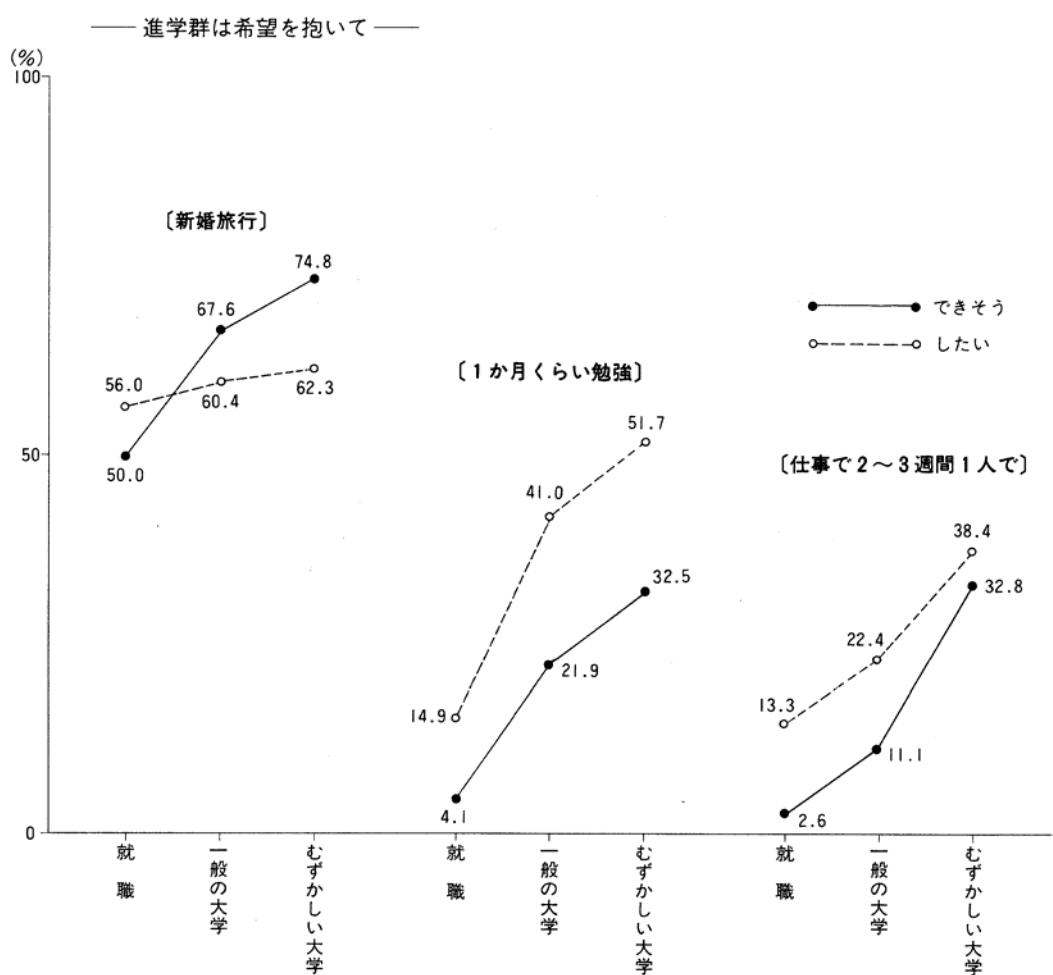


図9 海外でしたいこと・できること×進路



第III章 どれくらいの外国語の力がつくか



1. 習いたい外国語

外国といえば、文字どおり外国語を使う社会であり、日本人の多くが海外で、言葉で苦しんでいることは周知のとおりである。

ヨーロッパのように、陸続きでいくつもの国が共存している状況ならば、日本の感覚の他県の人という気持ちで、つまり、あまり違和感をもたずに外国人に接することになり、いつのまにか外国語も身についてこよう。またさまざまな人種のいりみだれるアメリカでも、異質の人がいるほうが社会のあたりまえの姿になる。

それにひきかえ、日本だと、せっかく習っても外国語を使う機会は少ないし、よほどの努力を重ねないと、外国語は身につきにくい。

そうした状況はともあれ、とりあえず、外

国は外国語のイメージを伴うが、「覚えた言葉」の第1位として、当然のことながら、英語があがってくる(図10)。そして、以下、フランス語、ドイツ語と続く。残念ながら、アジアの言葉に関心が薄いのは、図中の数値が示すとおりである。

なお、属性別の分析では、男子のほうが英語好きが多い(図8)。そして、女子では、以下のように、フランス語が好きで、アジアの言葉を敬遠する傾向が認められる。

	男子	女子	全体(%)
フランス語	59.8	< 73.3	63.9
中國語	29.6	> 25.2	28.3
韓國語	13.3	> 7.6	11.6

図10 覚えたい言葉

——何よりも英語——

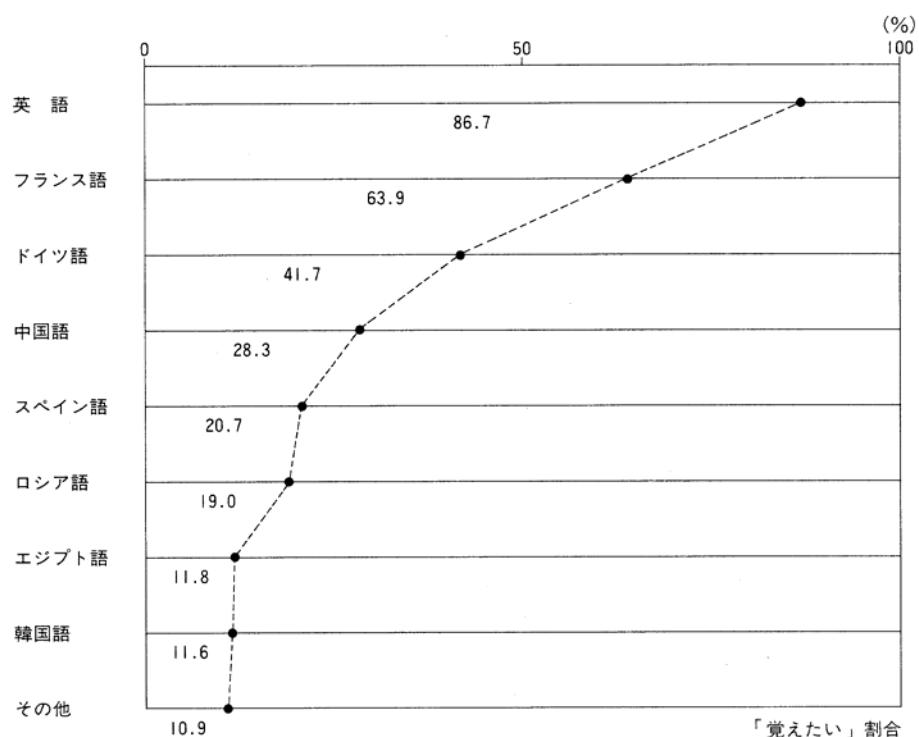
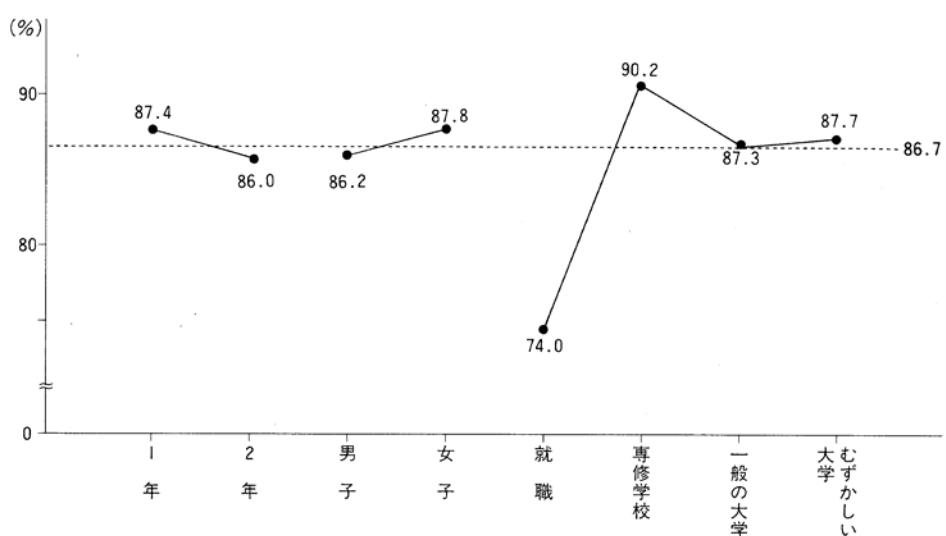


図11 英語を覚えたい×属性

——専修学校で語学の力につける——



2. どれくらい海外で暮らせるか

このように話したい言葉の中にも、「アジアよりもヨーロッパ」的な感覚がうかがえるが、行ってみたい都市として、図12のようにメルボルンやロンドン、ジュネーブ、パリが上位に並ぶ。そして、下位に、ソウル、タイペイ、マニラが位置している。高校生たちにとっても、「あこがれのヨーロッパ」、そして「近くで無関心なアジア」になるのであろうか。こうしたあたりにも、日本はアジアの一員なのかという問い合わせ、あたらしく生じてくるよう思う。

アメリカやヨーロッパが好きといつても「朝はご飯とみそ汁に限る」、あるいは「一日に一度は米を食べないと力が出ない」という人がいる。しかも、中年でなく若者の中に、

そういう人が少なくない。

食生活の面での純和風であって、外国にいかに和食のレストランがふえたといっても、それでは食事の度に和食の店をさがすことになり、海外旅行も楽しくあるまい。

そこで、海外でどれくらいの期間、生活できそうかを尋ねてみた。図13のように、日本語を話せなくても、そしてシャワーだけでも、10日ぐらいならなんとかなる。しかし、1か月となると苦しいかもしれないという。

したがって、多くの高校生にとっては、新婚旅行の時に10日ぐらい行くところが海外で、具体的には、ロサンゼルスやパリ、ロンドンがその行き先になる。

図12 行ってみたい都市

——どこでもよい——

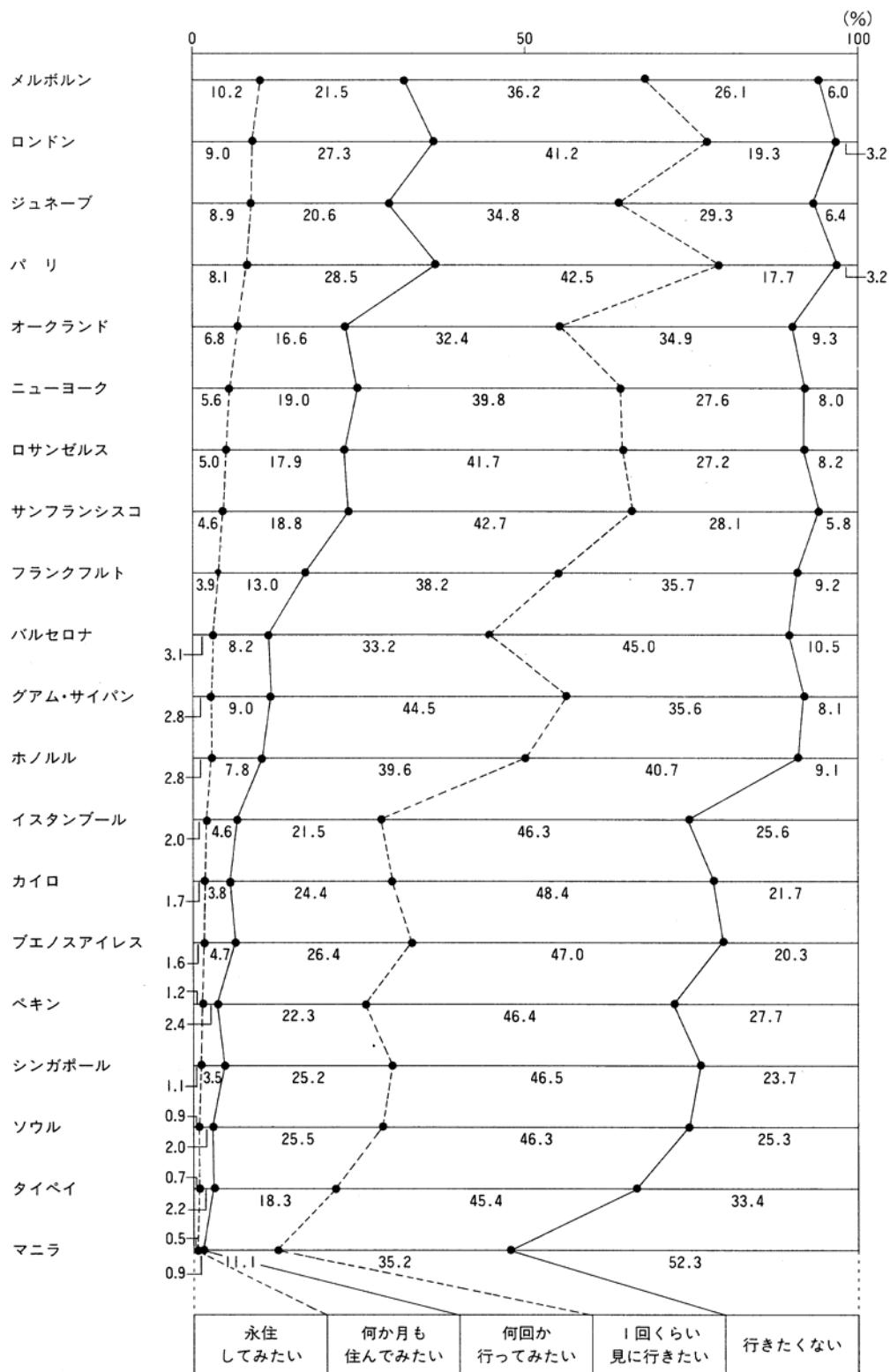
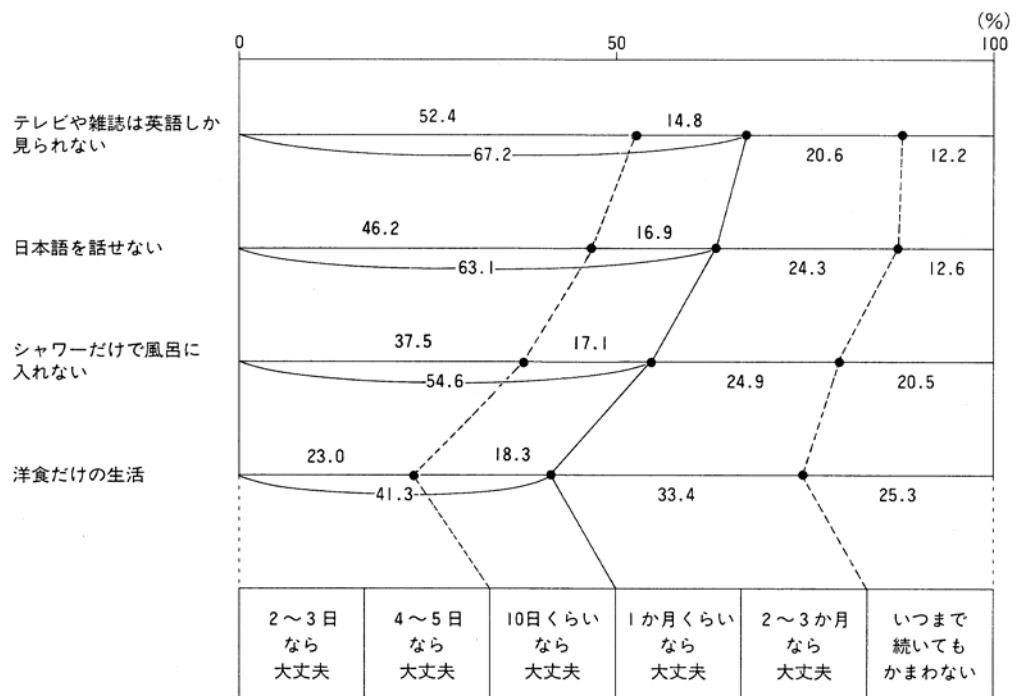


図13 海外でどのくらいやつていけるか

—— 10日くらいならなんとか ——



3. 英語を身につける努力

高校生にとって、外国はそれほど近い対象でないのかもしれない。こうした事情を反映してか、生徒たちは英語の力を伸ばす努力をあまりしていない。

CNNなどの情報を積極的に得るようになっているのが目につく程度で、英会話のスクールへ通ったり、FENを聞いたりしている生徒は1割を下まわっている（図14）。

そして、男女別にみると、図15のように、全体として英語の力をつけるのに熱心なのは、女子よりも男子のように見える。

一般的に、男子よりも女子のほうが英語の発音がきれいだ。それに大学の外国語学科に学ぶ学生は女子が圧倒的だ。したがって、英

語に関心を寄せるのは女子のほうだと思っていた。

しかし、図15の結果は予想と異なっている。もっとも図16によると、英語に関心を寄せているのは、むずかしい大学への進学を考えているグループである。彼らは英語が得意なうえに、将来、仕事の面で海外へ出かけることが多いと考えている。それだけに、今のうちから英語を身につけておきたいと思っているのであろう。

こうした意味で、英語に対する関心も、将来の人生設計に關係しており、漠然とした形の英語好きというのは、まれなケースなのかもしれない。

図14 英語の力をつけるため

——あまりしていない——

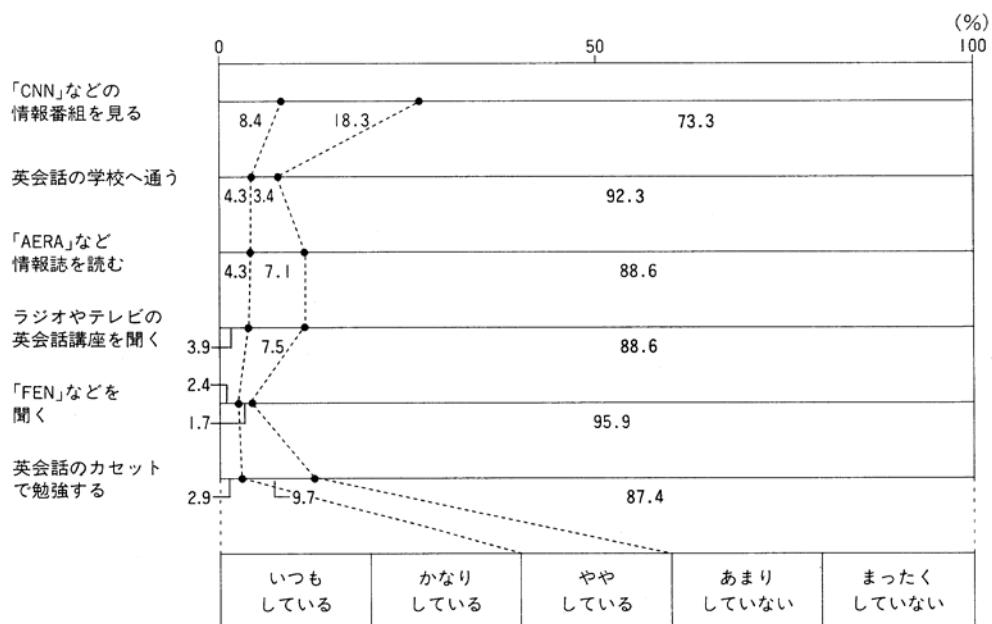
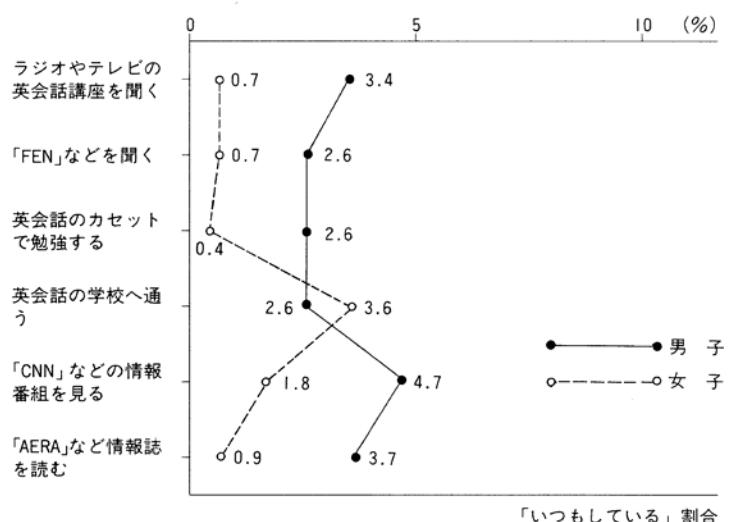


図15 英語力をつけるため×性別

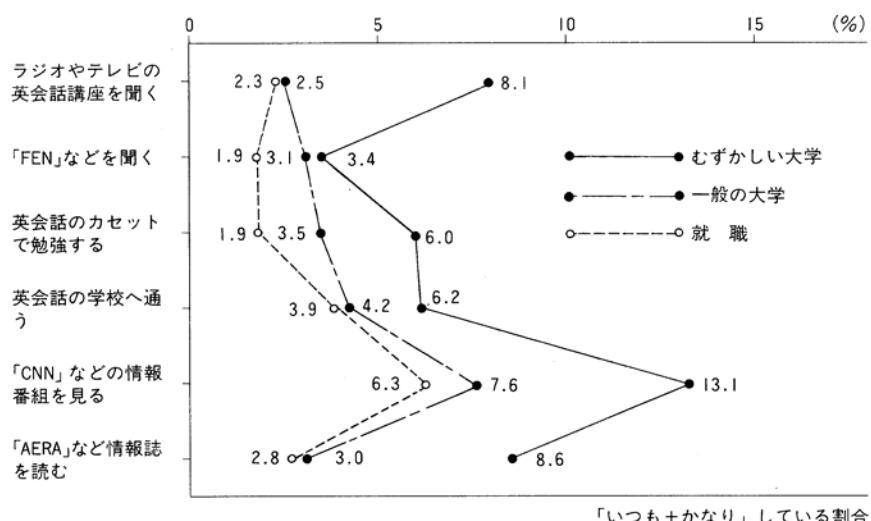
—— 男子のほうが熱心 ——



「いつもしている」割合

図16 英語力をつけるため×進路

—— 勤める者も英語を ——



「いつも+かなり」している割合

4. 20歳になった時の語学力

筆者は英語の教師ではないが、海外へ出かける機会は多い。これまでに、50回近く海外を旅したであろうか。しかも、その大半が取材や調査の打ち合わせで、いわゆる観光旅行は少ない。したがって、現地の人と話す機会が多く、帰国する度に、「今度こそ外国語をきちんと勉強しよう」と思う。しかし、そうした決意も数日の命で、日常生活の渦の中にまきこまれてしまう。もう少し若いうちに力をつけておけばよかったと思うのは、怠け者の口実なのかもしれないが、それでは高校生た

ちは、将来どれくらいの英語力が身につくと思っているのであろうか。

図17によると、「20歳ぐらいになった時、あいさつくらいはできるし、スーパーで買い物するくらいはなんとかなる」と思う。しかし、「生活に困らない程度の会話は自信がない」という。そして、20歳になった時の語学力について、性別では、これまでの傾向と同じように、女子より男子のほうが、語学力に肯定的な評価を示している（図18）。

図17 20歳くらいの英語の力

——あいさつくらいはできそう——

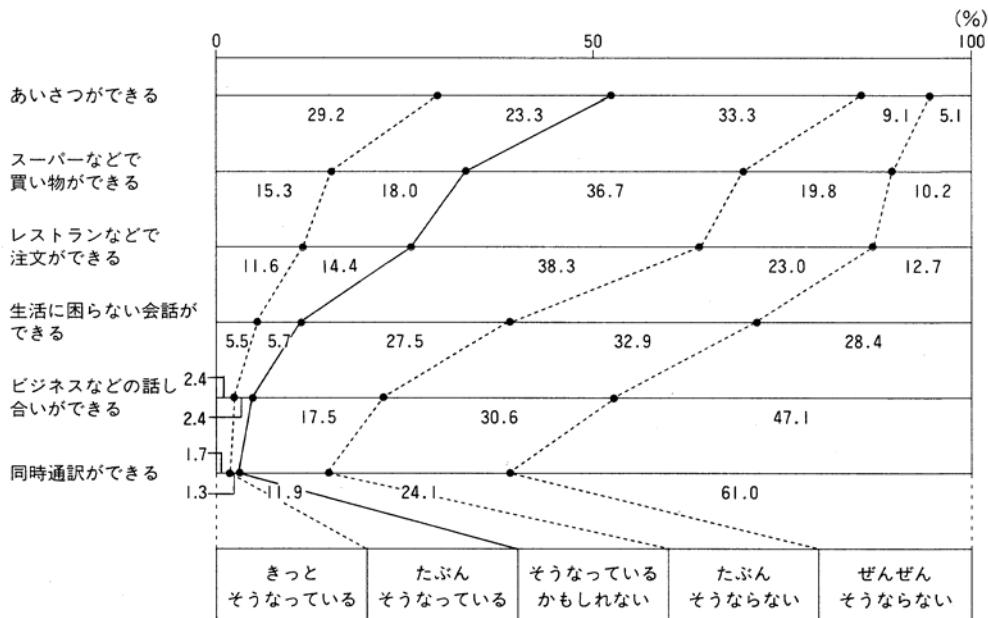
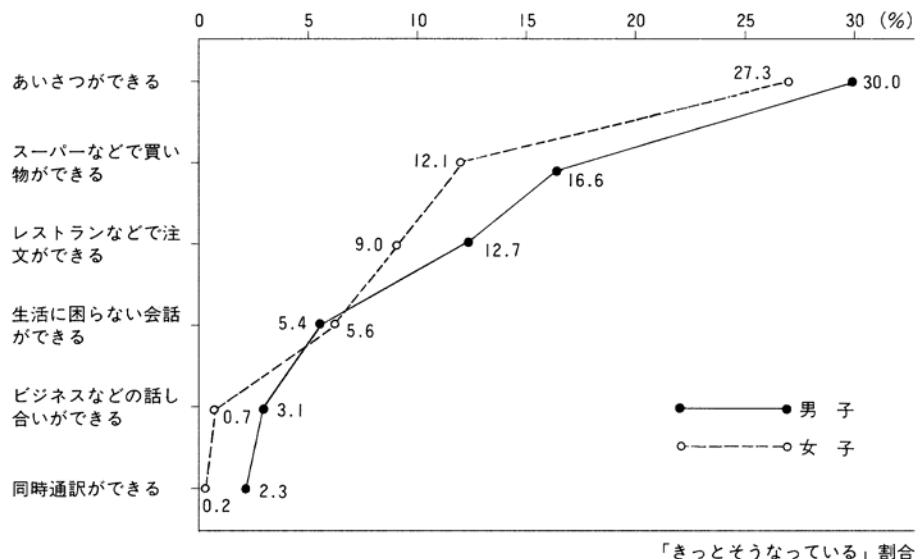


図18 20歳の英語力×性別

——男子のほうが積極的——



5. 40歳ぐらいの語学力

もっとも、高校生にとって「20歳のころ」は3～4年後のことで、しかも大学進学などの準備があることを考えると、その間に飛躍的に語学力がつくとは思われない。そこで、もう少し期間をのばして、40歳になったころ、英語の力がどの程度なのかを尋ねてみた(図19)。

さすがに20歳のころの見通しと比べると、「できそう」と思う割合が高まっている。

そこで、40歳と対比させて、20歳のころの英語の力をとらえてみると、図20のようなプロフィールとなる。20歳の時はたいしたことできそうもないが、40歳ぐらいになったら、あいさつはむろんのこと、生活に困らない程度の会話はできるようになりたいという。

この「40歳」の場合、「そうしたい」かどうかの願望を尋ねているが、多くの生徒たちがそうした願いを持っているのがわかる。そして、図21によると、進路別に着目した時、「むずかしい大学への進学」を考えているような高学歴志望者が、英語の力に強い願いをこめている傾向が得られている。こうしたタイプの生徒は「ビジネスなどの話し合いができる」について59.0%が「ぜひそうしたい」と答え、「同時通訳ができる」も48.6%と、ほぼ半数がそう願っている。しかし、就職群でそうした願いを持つ者は、ほぼ2割程度にとどまっている。願ったところで、「とてもなれそうもない」と、望みを断念しているのであろうか。

図19 40歳くらいまでにつけたい英語の力

——日常生活のレベルまで——

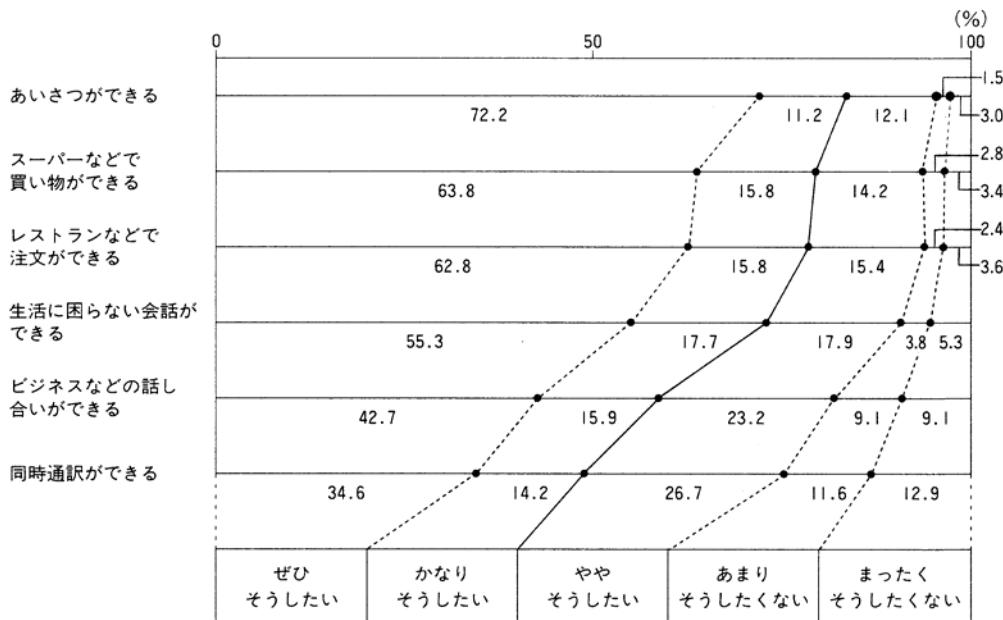


図20 英語の力・現実と希望

——40歳にならなんとか——

20歳くらい=「きっとそうなっている」割合
40歳くらい=「ぜひとうしたい」割合

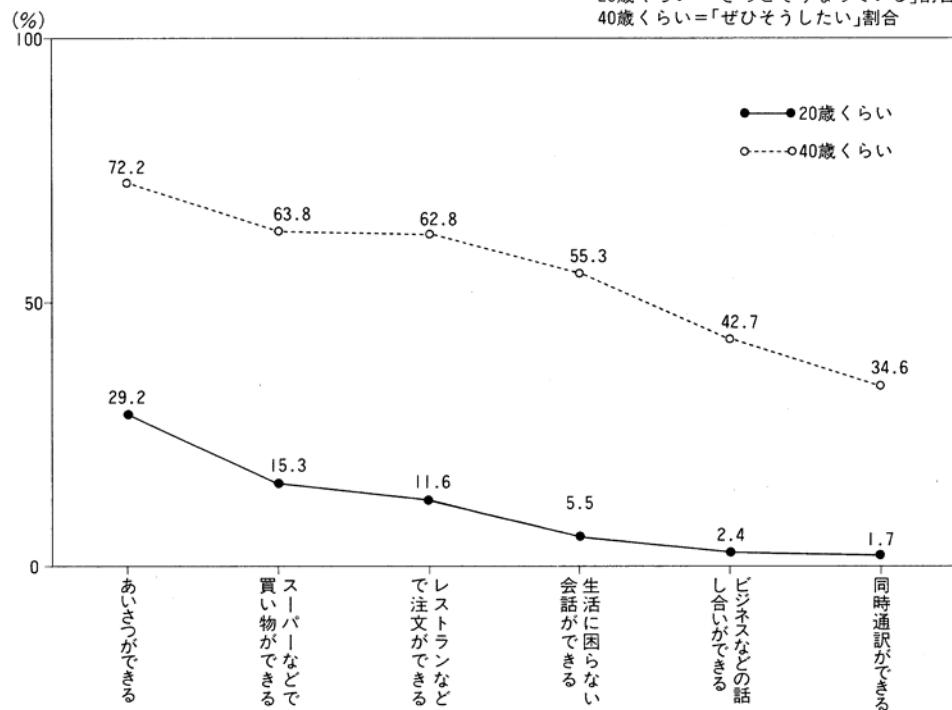
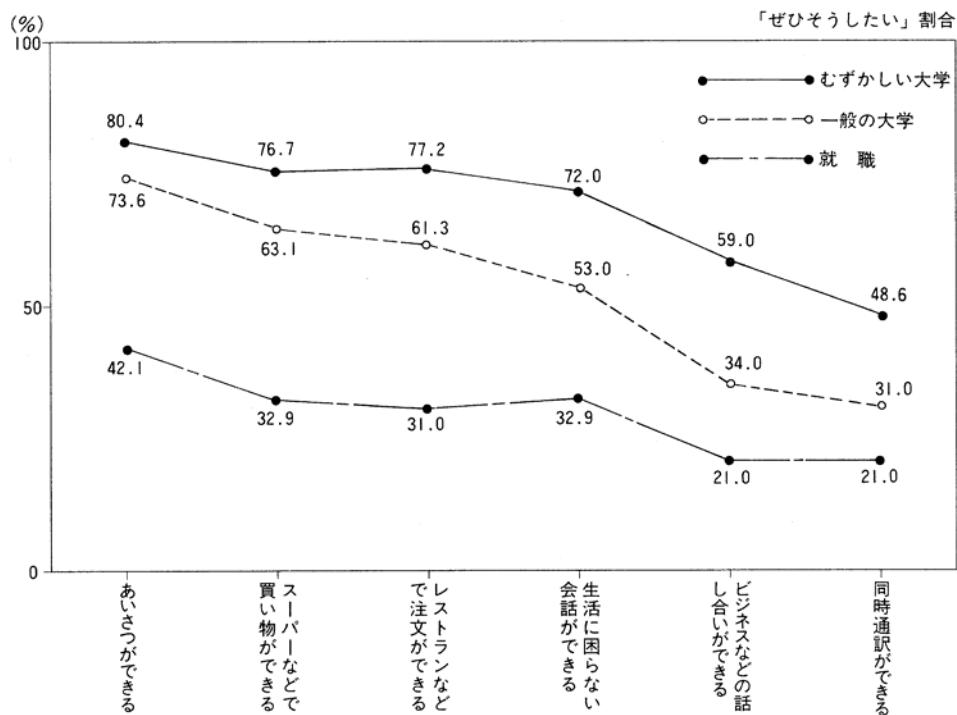
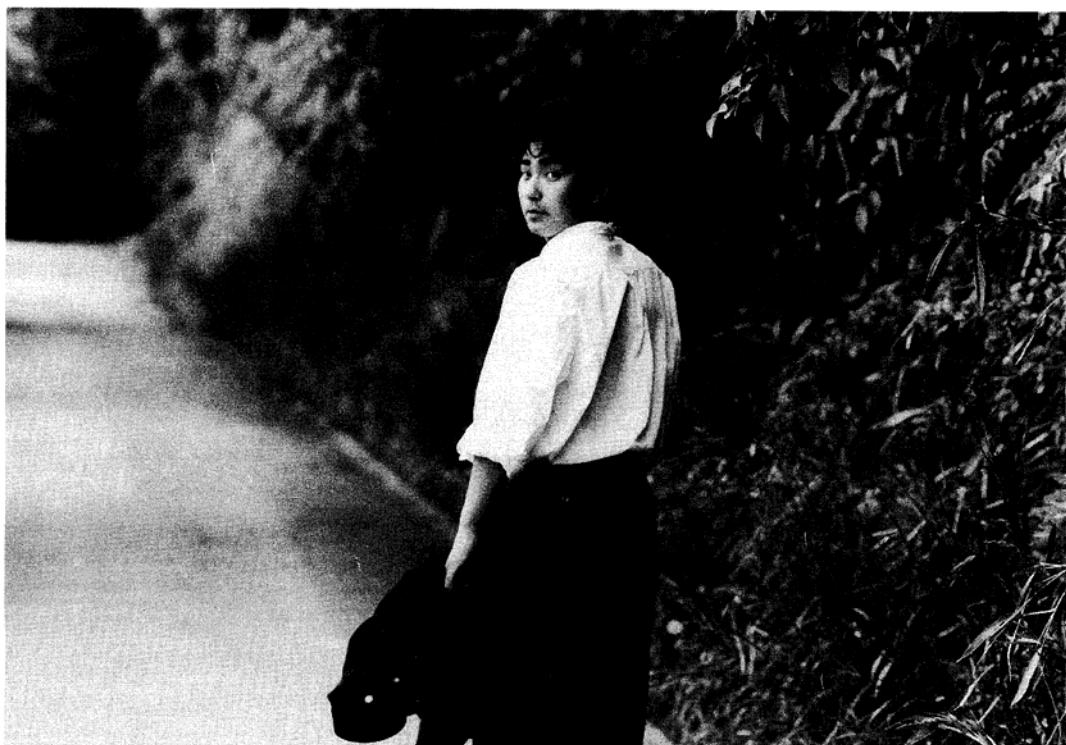


図21 40歳の英語の力×進路

—— むずかしい大学=活躍できる ——



第IV章 諸外国のイメージ



1. 日本のイメージ

これまでふれてきたように、高校生たちにとっての外国は、「新婚旅行の時に行くところ」であり、それも、アメリカやヨーロッパが、彼らのイメージにある外国であった。そうしたなかで、「むずかしい大学への進学」を考えている高学歴志望者が、もう少し積極的に将来の自分の仕事に関係させて、外国をとらえているのが印象に残った。

こう見えてくると、「国際化」という言葉は盛んだが、高校生たちにとって、外国はまだまだ遠い異国なのがわかる。実際に多くの生徒たちは、将来彼らが思っている以上に、外国との接点をもつ生活を送るのであろうが、少なくとも、生徒たちはそうした感じを抱いて

いない。

そこで、以下、高校生たちにとっての外国のイメージを、もう少し具体的にとらえることにしたい。

まず、「家族とともに生活する」としたら、どこに住みたいかについて、図22のように、パリとニューヨークに人気が集まり、ニューデリー、ペキン、ソウルを敬遠する生徒が多い。

欧米に親しみを感じるが、アジアを敬遠する、そうした傾向は、ここにもあらわれているが、もう少し具体的に、それぞれの国のイメージを尋ねることにした。

まず、日本についてのイメージは、図23のとおりで、上位と下位の3項目をあげると、以下のようなになる。

上位	下位	(%)
①平和な	①土地が広い	3.3
②豊かな	②人が親切	16.9
③おいしい	③しあわせ	40.4

(「まったく+かなり」そう思う割合)

平和で豊かな社会だが、土地が狭く、親切な人があまり多くない、というのが、日本のイメージとなる。

全体としてみると、かなり的射た日本イメージのような印象を受けるが、それでは、他の国について、生徒たちはどのようなイメージを抱いているのであろうか。

あらためてふれるまでもなく、イメージはいわば、漠然とした断片の集大成したコンセプトなので、どうしてそういうイメージが作られたのかを明らかにするのはむずかしいが、イメージはふつう考えるよりも正確である場合が少なくない。

図22 家族と生活するとなったら

——パリが好き——

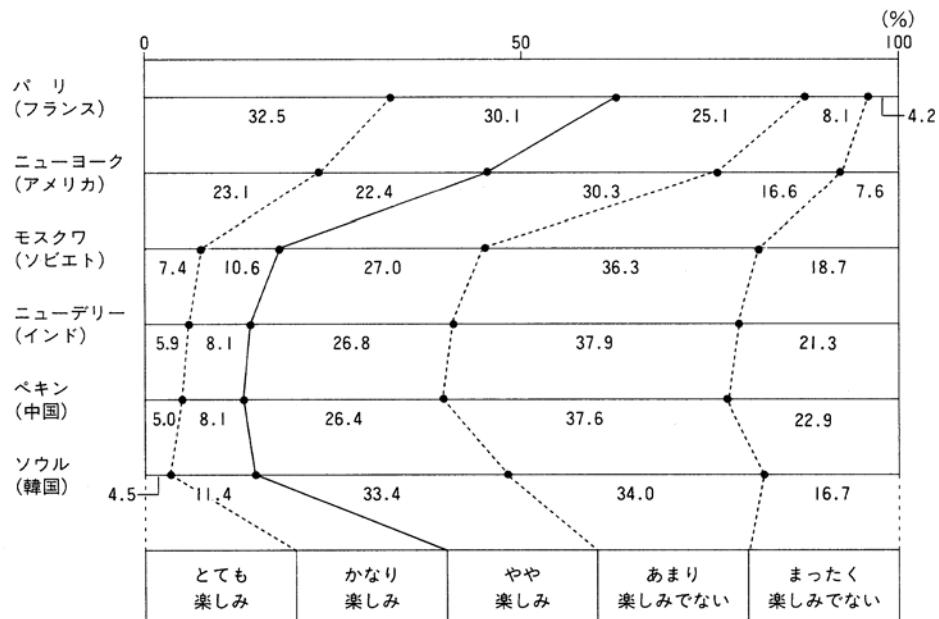
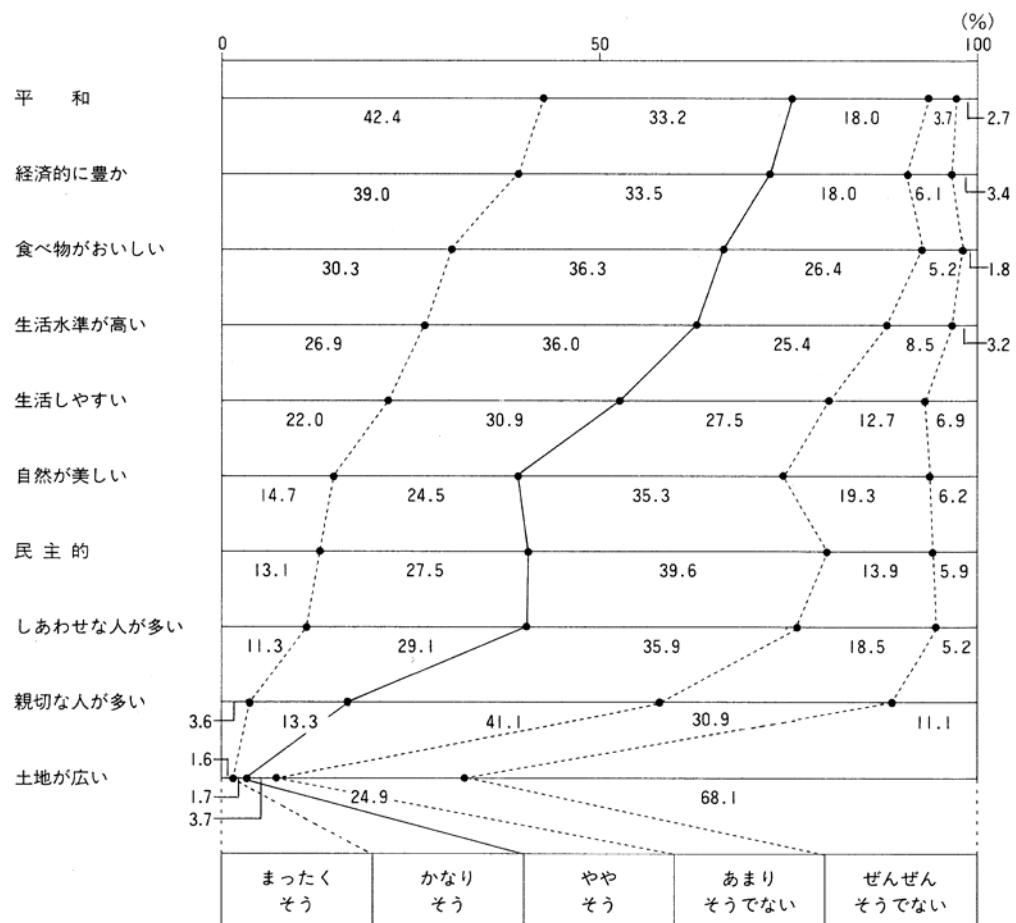


図23 日本のイメージ

—— 平和で豊か ——



2. アメリカのイメージ

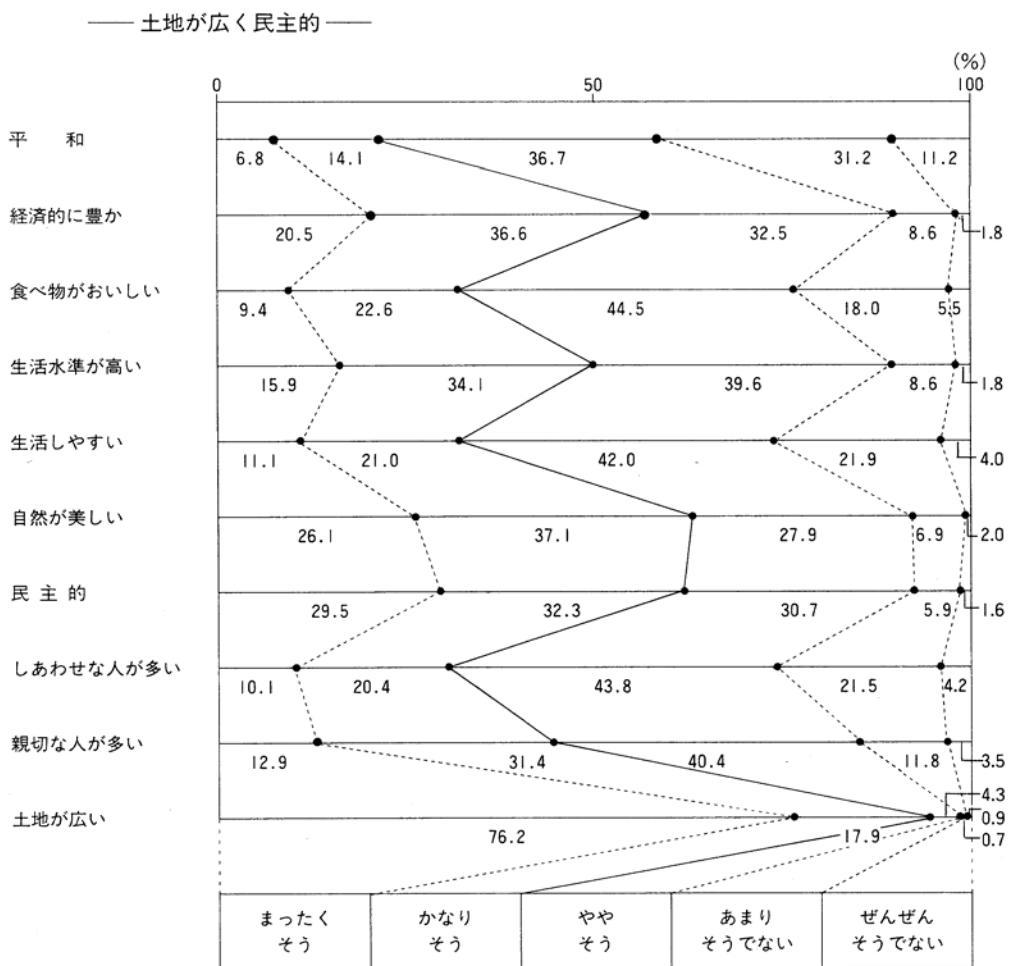
日本のイメージが明らかになったところで、アメリカのイメージはどうか。図24にプロフィールを示したが、ここにも上位と下位の3項目を拾い出してみよう。

上位	下位	(%)
①土地が広 い	①平和な い	20.9 94.1
②自然が美 しい	②しあわせ い	30.5 36.7
③民主的	③食べ物がお いしい	32.0 32.1
	④生活しやす い	61.8

土地が広く、自然が美しい。そして、民主的な国がアメリカだ。しかし、アメリカは、そうした一方、生活しやすいといえず、食事がおいしくないというイメージである。

CNNなどで、アメリカのなまの姿が映されることが多い。それだけに、生きたアメリカを映像を通じてとらえることができる。そうした背景があってからか、高校生の抱くアメリカ像はそれほどピントはずれでないようと思える。

図24 アメリカのイメージ



それではソビエトのイメージはどうか。くわしいプロフィールは図25を参照してほしいが、それぞれの上位、下位の項目は以下のとおりである。

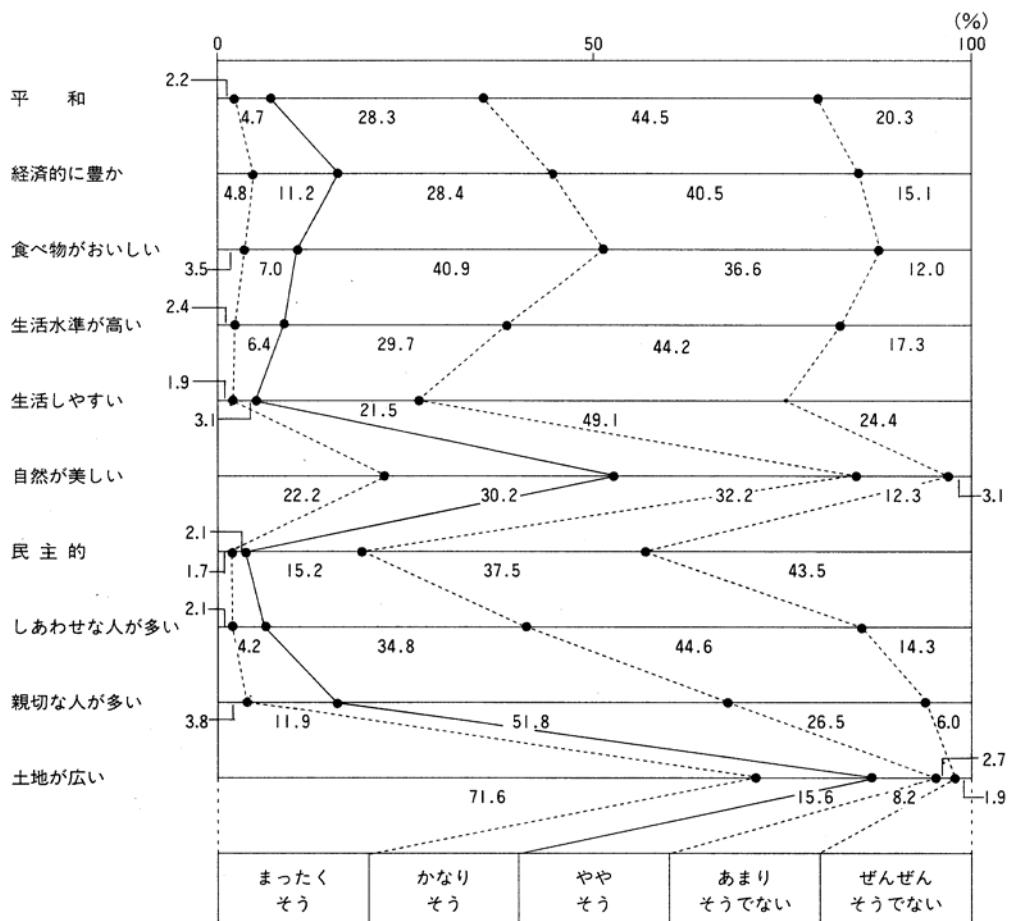
上位	下位	(%)
①土地が広い 87.2	①民主的 3.8	
②自然が美しい 52.4	②生活しやすい 5.0	
	③しあわせな人が多い 6.3	

ソビエトの場合、肯定的なのは、わずかに「土地が広く、自然が美しい」だけで、その他の項目は否定的な反応で占められている。

「生活しにくく、しあわせな人が少なく、民主的でない」のがソビエトというイメージである。

また「ソビエト料理がおいしい」は10.5%で、大半の生徒がおいしくないと答えているが、生徒たちがソビエト料理をそんなに食べているとは思えないので、「食べ物がまずい」など、偏見と思われる項目も見うけられる。しかし、大筋において、高校生のソビエト・イメージは、おとなたちのそれとさほど開いていないように見える。

図25 ソビエトのイメージ
—— 土地が広く美しい ——



3. 韓国のイメージ

それでは、韓国のイメージはどうか。図26に示したとおり、残念ながら、肯定的な評価がまったく認められない。そして、「平和」(9.8%)的でなく、「民主的」(9.3%)でなく、また「生活しやすい」(6.4%)といえず、「経済的に豊か」(8.4%)といえないイメージが抱かれている。

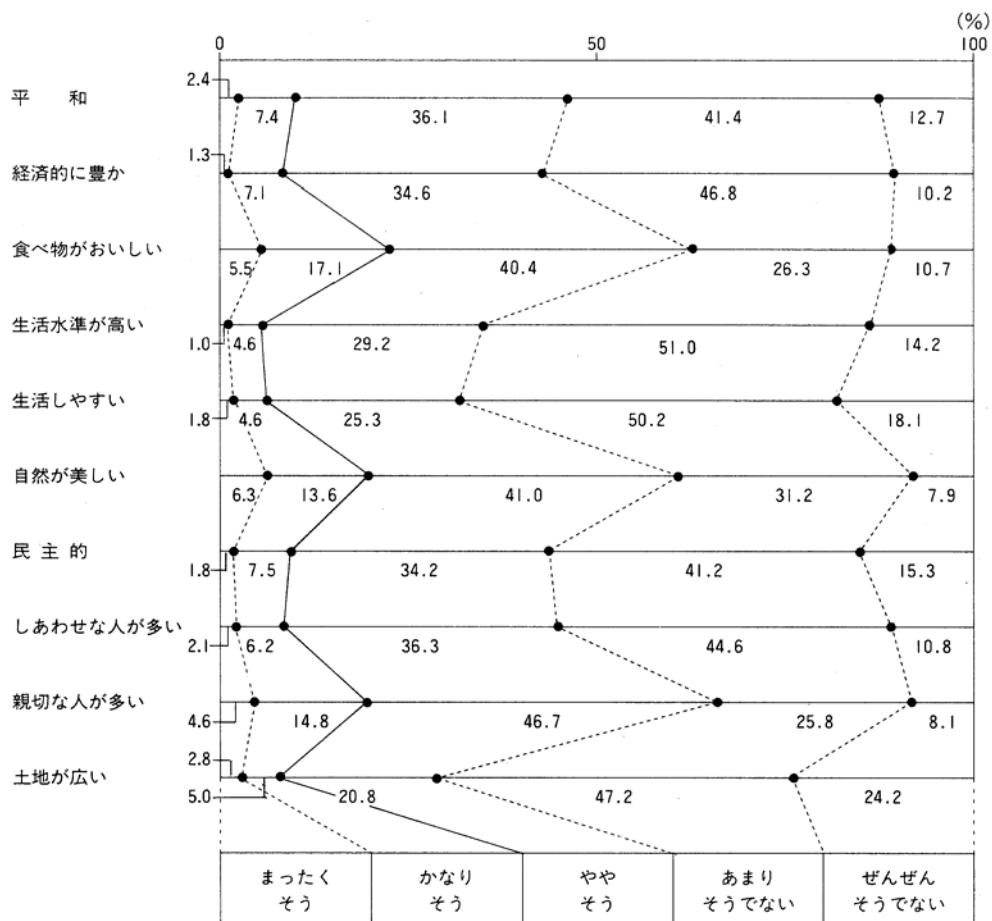
韓国はNIESを代表する優等生といわれ、ソウルを中心とした経済的な発展は目をみは

るものがある。また、ソウルを訪れた印象では、食料品などの生活用品の値段は安定し、土地などもそれほど高くなく、それに人情味も豊かで、かなり暮らしやすい町という印象を受けた。

したがって、高校生の韓国イメージは、偏見に根ざしたものが多いように思う。といっても、筆者自身、何年か前にソウルを訪れるまで、韓国に対して高校生と同じようなイ

図26 韓国のイメージ

—— イメージがわからない ——



メージを抱いていたのを思いおこす。

正直にいって、韓国をもっと暮らしにくく、人情味に欠け、食べ物も乏しい社会と思っていた。しかし、考えていた以上に、ソウルが発展しているだけでなく、一度うちとけると日本人以上に信義を大事にする人たちで、そのうえ、日本のコーリアン・レストランで食べる韓国料理とは比べようがないくらいに、キムチや焼肉がおいしく、それに種類が多いのに気づいた。

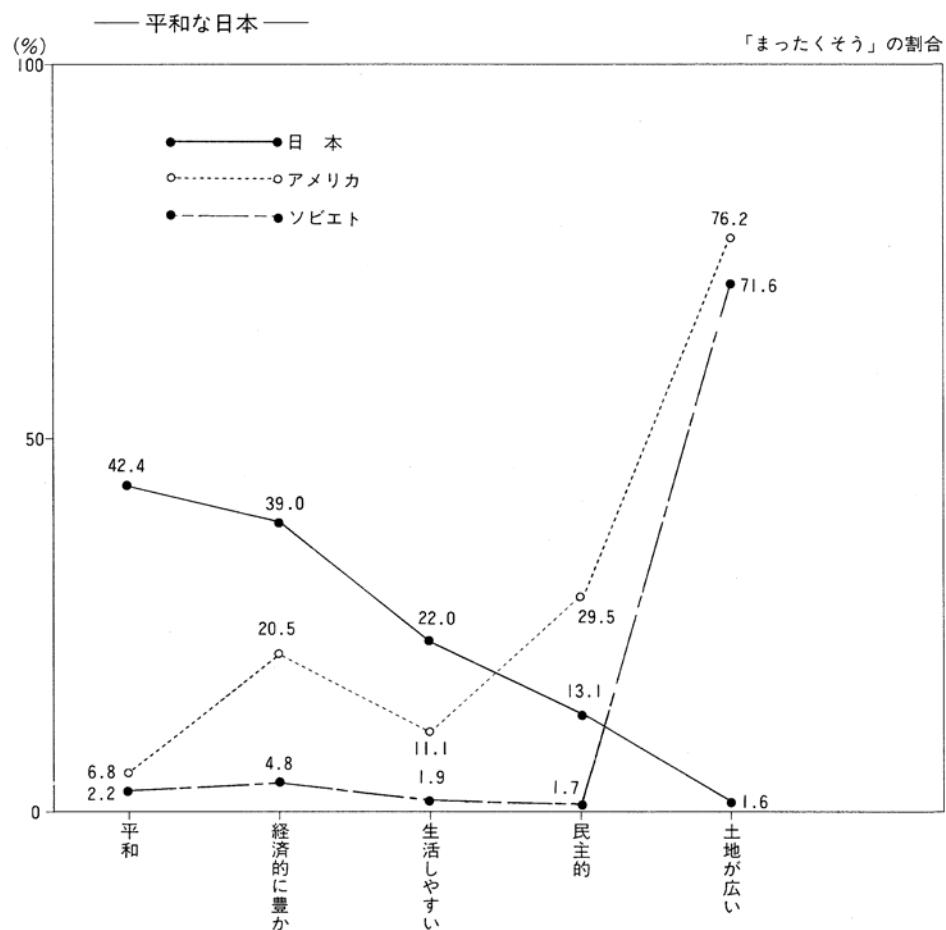
そして、韓国が魅力に富んだ社会だと感じるようになった。したがって、筆者の個人的な体験からいっても、韓国に限らず、その社

会へ行き、自分の目や耳を使って、社会を知ることが偏見をなくすための第一歩のように思う。

そうした意味で、国際化を図るために相互の交流が何よりも必要だと思うが、日本、アメリカ、ソビエトと対比させてイメージをまとめてみると、図27のようになる。生徒たちは、アメリカやソビエトと比べ、日本をはるかに豊かで平和な国だと思っているのがわかる。

したがって、こうしたデータは、高校生たちが、日本に予想される以上に好意的な評価を下していることを示していよう。

図27 日本、アメリカ、ソビエトのイメージ



4. 日本の高校生

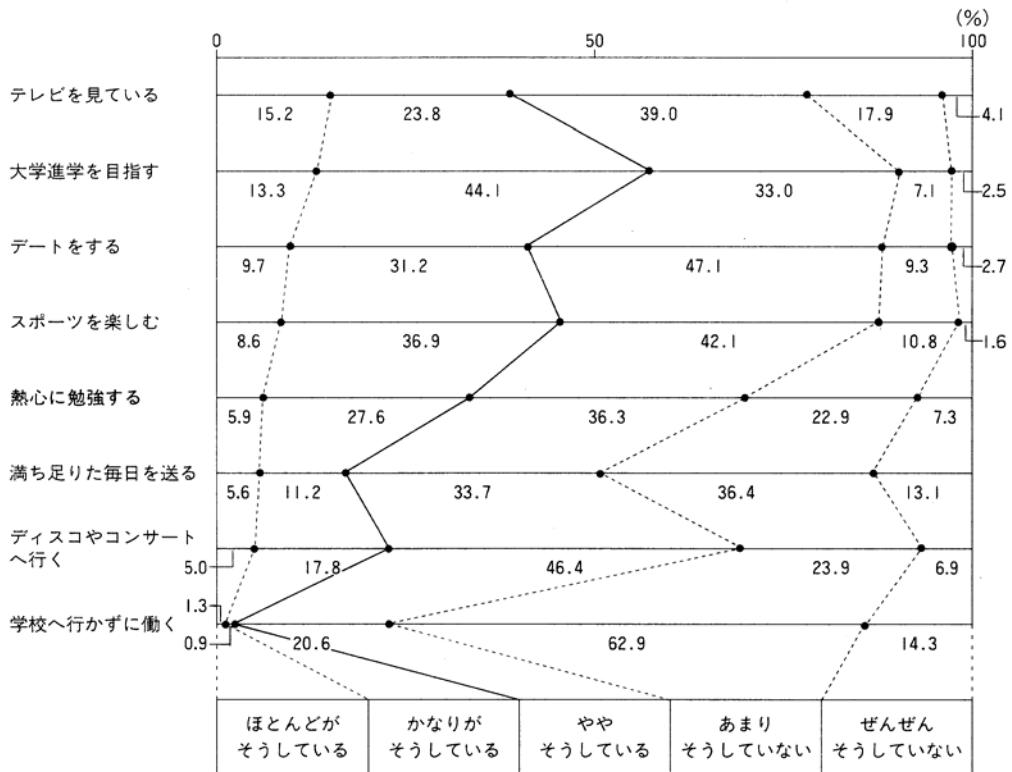
これまで紹介してきたのは、それぞれの国についてのイメージであった。それでは、それぞれの社会に住む高校生に対して、どのようなイメージが抱かれているのであろうか。

まず、日本の高校生、つまり自分たちに対する自己評価は図28のとおりで、目につく傾向は以下のとおりである。

大学進学を目指している 57.4%
満ち足りた毎日を送っていない 49.5%
学校へ行かずに働くことはない 77.2%
つまり、働くことなく、大学進学を目指しているが、しかし、充足した毎日を送っているとはいえないのが日本の高校生となる。

図28 日本の高校生の生活(イメージ)

——大学進学を目指しつつ、テレビも——



5. アメリカの高校生のイメージ

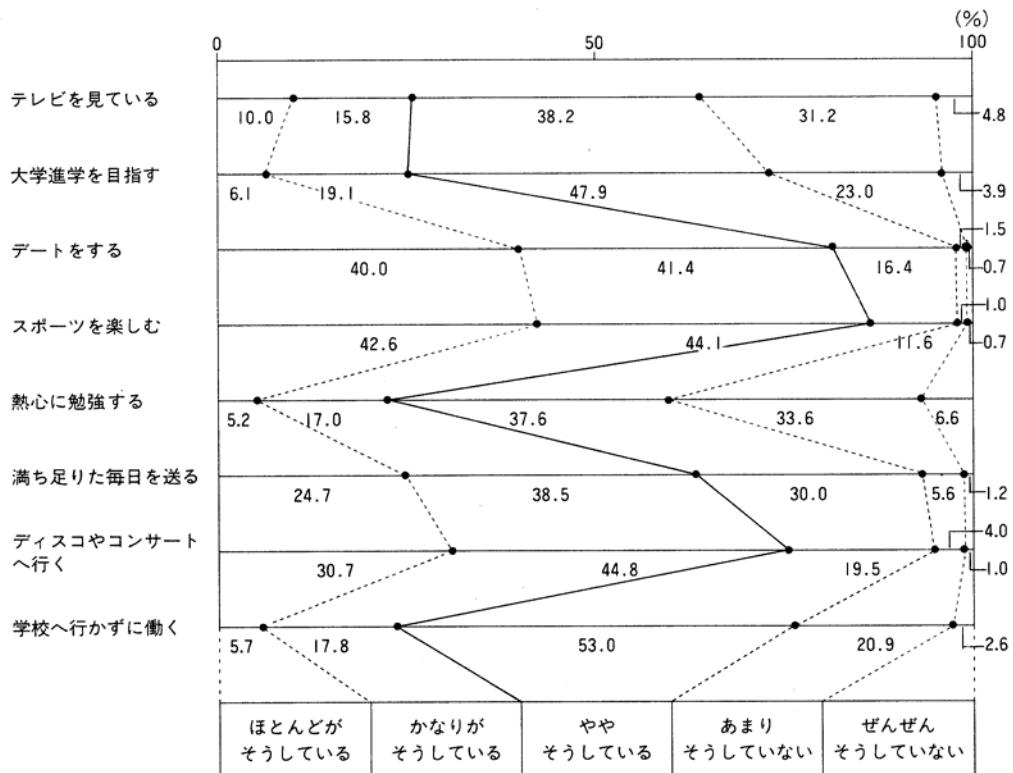
なんとなく、よくわかる感じのデータだが、それではアメリカの高校生について、どのようなイメージを抱いているのか（図29）。

- ① スポーツを楽しんでいる 86.7%
- ② デートをしている 81.4%
- ③ ディスコへ行く 75.5%
- スポーツを楽しみ、デートをしたり、ディスコへ行くなど、楽しい生活を送っているのが、アメリカの高校生だという評価である。

- ④ 热心に勉強しているとはいえない 22.2%
 - ⑤ 学校へ行かずに働いてはいない 23.5%
 - ⑥ 大学進学を目指しているとはいえない 25.2%
 - （「ほとんど+かなり」そうしているという反応）
- アメリカの高校生について、楽しそうだというイメージが抱かれているのがわかる。実

図29 アメリカの高校生の生活（イメージ）

—— デートとスポーツ ——



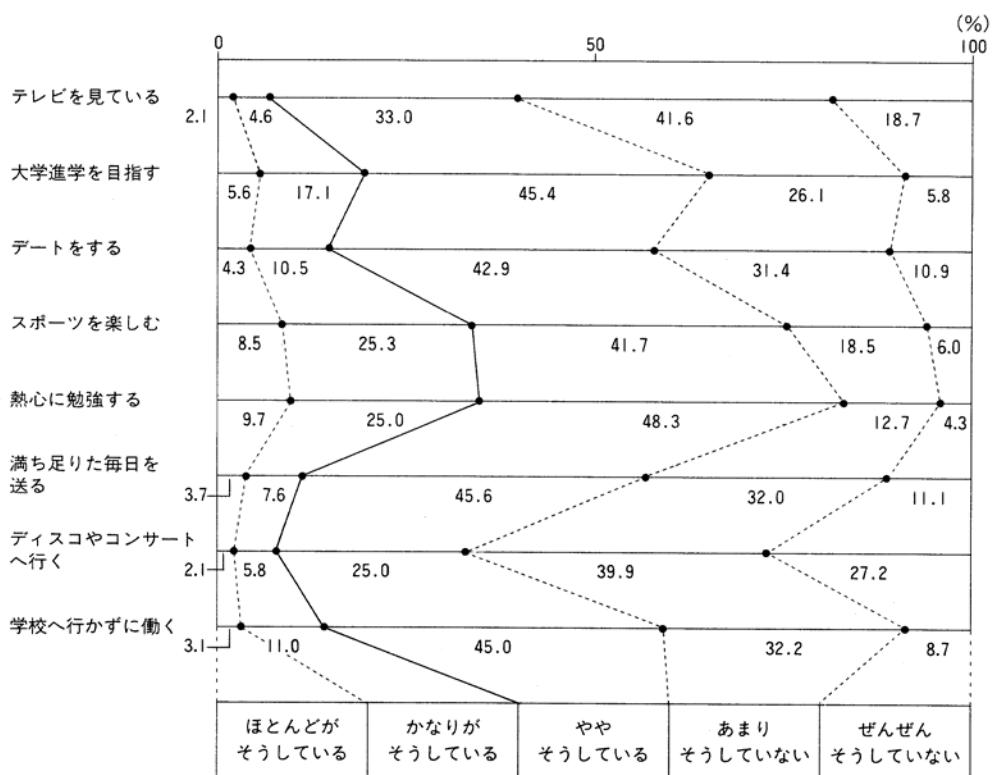
際に、アメリカの高校を見学してみると、アメリカの高校生はいわれている以上に、まじめに勉強している印象を受けるが、そうした一方、スポーツを楽しみ、デートをしているのも確かなので、日本の高校生たちは、アメリカのうらやましい部分のみを見ているようと思う。

国々のイメージについては、アメリカは好意

的だったのに対し、ソビエトは否定的なイメージが強かった。それでは、ソビエトの高校生についてはどうか。図30にその結果を示したが、全体として、イメージがシャープでない。「勉強をしている」を例にすると、「そうしている」とも、「そうしていない」ともいえず、「ややそうしている」のではないかが48.3%とほぼ半数を占める。

図30 ソビエトの高校生の生活(イメージ)

——あまりわからない——



6. 韓国の高校生

国レベルだとイメージはわくが、高校生と限定されると、具体的な姿を思いうかべにくらいのであろうか。

そして、韓国の高校生についてのイメージを図31に示した。

- ① 熱心に勉強している 62.7%
 - ② デートをしている 7.6%
 - ③ ディスコへ行く 3.4%
- (「ほとんど+かなり」そうしている割合)

遊んだりすることなく、熱心に勉強しているのがソウルの高校生だと、日本の生徒たちはみている。

そこで、こうしたイメージをひとつのグラフにまとめてみる図32のようなプロフィールとなる。

アメリカ——熱心にデート
韓国——熱心に勉強
日本——大学進学を目指して

図31 韓国の高校生の生活(イメージ)

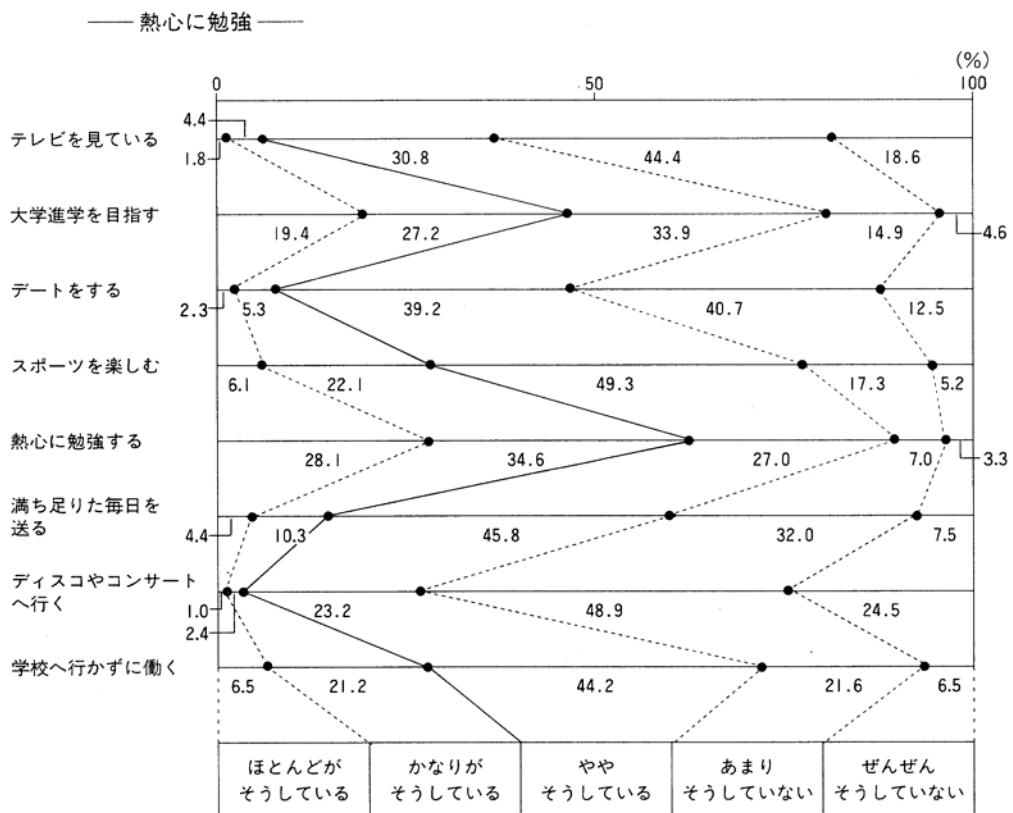
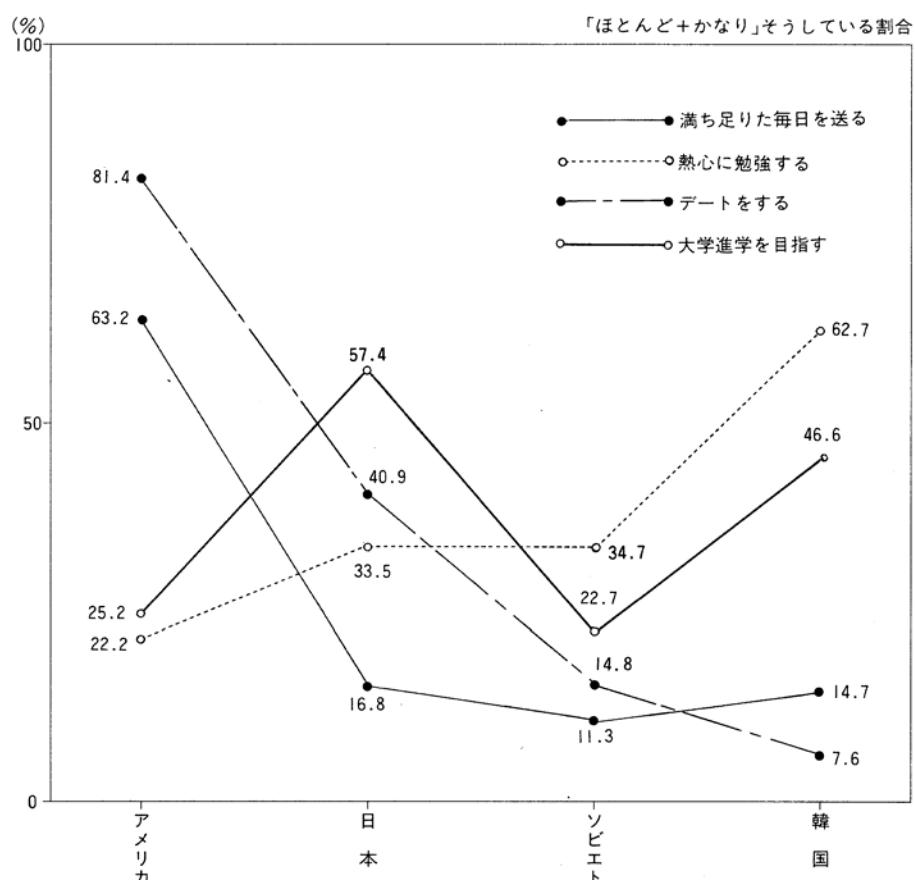


図32 高校生の生活（イメージ）

—— アメリカの生徒は楽しそう ——



7. 仲良くしたい国民

人種的な偏見のスケールというとらえ方がある。一般的に、どの人たちとも仲良くと言うのは簡単だが、実際に、その人たちがすぐ近くに住み始めたり、友人となるのは敬遠したい。そうした気持ちが、偏見のベースになるという把握だが、どこの人と仲良くしたいかについて、図33のような結果が得られている。

ここでも、もっとも仲良くしたいのがアメリカ、次いで、フランスで、欧米に親しみを抱いている傾向が顕著で、中国や韓国などのアジアの数値が低いが、かといって、「仲良くしたくない」という割合は少ない。

したがって、積極的に敬遠したいのではないよう思うが、そうした人たちが隣に引っ

越してきたらどうか。図34のとおり、アメリカ人やフランス人がくるのを楽しみという生徒が6割前後に達する。しかし、アジアの人たちに対しては、引っ越ししてきてほしくないとは思わないものの、引っ越してくるのが楽しみともいえないという反応が得られている。好意的でもないが、かといって、反撥するわけでもないという結果である。

さらに、「お姉さんの結婚相手」としてはどうかについて、図35のように、ここでもアメリカやフランスの人たちが相手なら、かなり賛成したい。しかし、相手がアジアの人だと、「あまり賛成したくない」という気持ちが強い。

図33 仲良くしたい人

—— どこの人とも仲良く ——

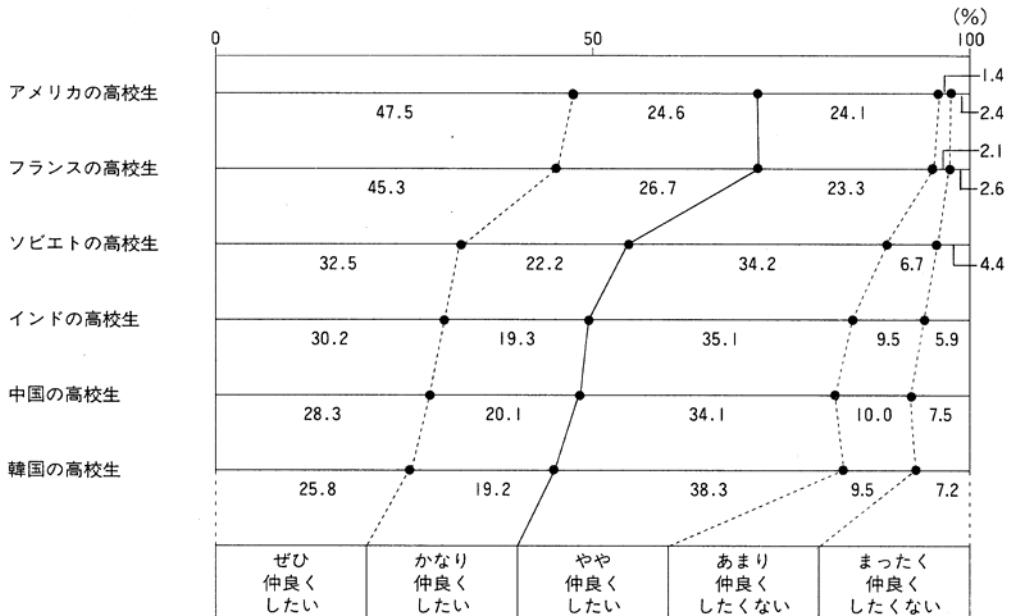


図34 隣家に引っ越してくる家族

—— アメリカは歓迎 ——

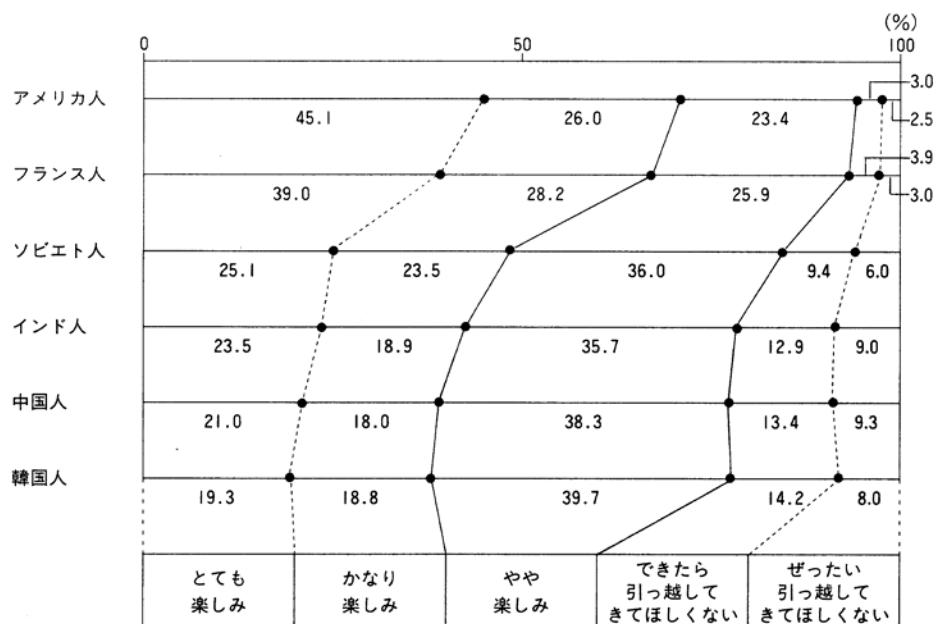
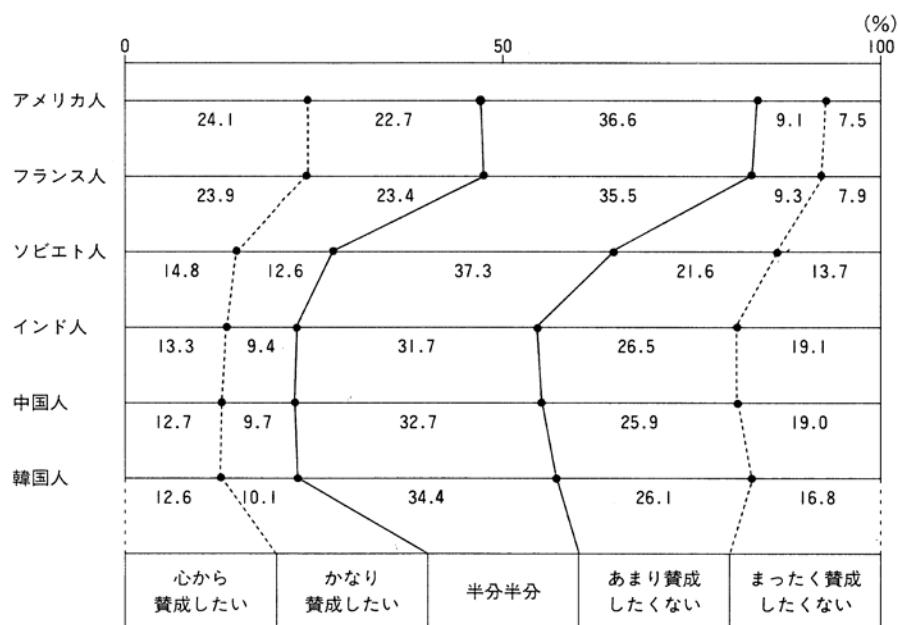


図35 お姉さんの結婚相手

—— 外国人はなんとなく嫌 ——



まとめにかえて

こうしたデータを通して、二つの傾向が気にはかかった。まず、国際化が叫ばれているわりに、生徒たちが、外国を自分と無縁と思っている点で、新婚旅行に海外へ行くことはあっても、それ以外で、外国生活をすることはないだろうという。

それだけに、外国についての関心も薄く、外国語を学ぼうとする態度もあまりシャープではなかった。どうやら国際化の言葉だけが走りすぎている印象を受ける。

それと同時に、外国というとアメリカそしてヨーロッパに関心が集中し、アジアについて無関心なことも気にかかった。特に、アジアについては情報も乏しく、偏見がそのまま

蓄積されている印象を受ける。

したがって、国際化を進めていくためには、CNNのニュースを流す、あるいは外国の映画をよく観る、そして海外生活を描いた本を読むなど、高校生と外国との接触の度合いを増すと共に、アジアについての理解を深めることが大事であろう。

さらにいうなら、国際的な視野をもつことにより、日本についての理解も深まることを考えると、本レポートで紹介した高校生たちの姿は、彼らの日本理解の乏しさを暗示している。いずれにせよ、生徒たちに日本、外國を問わず、生きた社会について学ばせる必要を痛感した。